

総合研究11 日・英慣用表現の対照研究

研究代表者 寺澤芳雄

第2部 日本語における身体語彙感情表現

とりまとめ・執筆担当 上野田鶴子・眞田雅子・屋名池誠

用例英訳担当 エドワード・L・スピア

上記以外の研究分担者 進藤咲子・(計画段階まで)古田啓

1. 調査対象の範囲

1. 1. 慣用句の範囲

身体部位名を含む感情表現の範囲に限って言えば、日本語には、狭義の慣用句、すなわち意味的に不透明な固定的な語連結は、英語にくらべごく少ない。そのため、本研究では慣用句の規定を緩くし、語連結が固定的なものは広くとりあげることにした。ただし、句を構成する語ないし語の用法がその句のかたち以外では現在用いられないため、固定的語連結として認定されているだけのものはのぞいている。

語連結であるから、もちろん1語のものはとらないが、一般に1語としてあつかわれていても、複合サ変動詞（漢語語基なら2字音単位以上のもののみ）はとりあげた。語基部分とスルの部分とが

アクセント単位や最小呼気段落として別単位をなす

語基部分が格標識ヲをとれる（それに伴い、とりたて助詞や提題助詞もつきうる）という点で、形態論的には2語の連続とみられるからである。（上野・眞田・屋名池）

1. 2. 身体語彙の範囲

表1に見るように、本研究では以下のような範囲を身体語彙としてあつかった。

1. 狭義の身体部位名
 - 1.1. 人体の総称
 - 1.2. 体表の区画
 - 1.3. 体表の構成要素
 - 1.4. 人体内部の構成要素
 - 1.5. 1.2.~1.4.の複合した表現
2. 人体からの産生物

2.1. 液体

2.2. 固体

2.3. 気体

3. 精神活動の座・主体

表1 日本語の身体語彙体系と慣用句の分布

(数字は慣用句の例数。p.43参照)

1. 狭義の身体部位名	
1. 1. 人体の総称	
からだ・身体・体・肉体・体軀	
み	7 (8)
全身・総み・五体・満身	
五臓・五臓六腑〈重出〉	
ほねみ〈重出〉	2 (2)
かたみ〈重出〉	2 (2)
はだみ〈重出〉	
肢体	
身体髪膚	
1. 2. 体表の区画	
a あたま・頭部・かぶり・こうべ・かしら・おつむ・頭 ^ず	3 (3)
b あたま〈重出〉・とさか	6 (7)
c かみ・かみのけ・毛髪・頭髪・おぐし・みぐし・～髪	2 (3)
d まえがみ	
d うしろがみ	1 (1)
d 鬢〈重出〉・こ鬢	
d もみあげ	
c つむじ	1 (1)
b 鬢〈重出〉	
b かお・つら・顔面・かんばせ・おもて・～顔	23 (29)
c ひたい・おでこ・ぬか	2 (4)
d ひたいぎわ・はえぎわ	
d こめかみ	
d 眉間	1 (1)
c まゆ・まゆげ・柳眉・～眉	8 (15)
c め〈重出〉・まなこ・おめめ	15 (18)
d まぶた	
e うわまぶた	
e したまぶた	
d まつげ	
d めがしら・めもと	1 (1)
d めじり・まなじり・めくじら・めかど	3 (4)
d め〈重出〉・めだま・めのたま・眼球	2 (3)
e ひとみ・くろめ	
e しろめ	
c めのした	

c	みみ	5 (5)
	d みみたぶ	
	d みみのあな	
c	はな	8 (9)
	d はなすじ・はなばしら・はなっばしら・鼻梁	
	d はなのさき・はなさき・はなのあたま・はなづら・はなつつら	
	d こばな	2 (2)
	d はなのあな	
	d はなげ	2 (3)
c	はなのした	1 (2)
	d はなみぞ・人中	
c	くち	2 (2)
	d 口角	
	d くちびる	2 (2)
	e うわくちびる	
	e したくちびる	
	d は・はのね・歯牙・～歯	5 (5)
	e まえば	
	e いときりば・犬歯	
	e おくば	
	f おやしらず	
	d はぐき	
	d した・べろ	5 (5)
	e したさき	
	d うわあご	
	e のどちんこ・のどびこ	
c	ほお・ほほ・ほっぺた・ほっぺ	4 (6)
	d ほおほね	
	d えくぼ	
c	あご・おとがいがい	2 (4)
	d したあご	
	d えら	
c	ひげ	1 (1)
	d ほおひげ	
	d くちひげ	
	d あごひげ	
c	かおいろ・血色	5 (6)
c	相好・表情	2 (2)
b	くび・こくび・くびすじ・くびったま	4 (5)
c	のど〈重出〉・のどもと	
	d のどほとけ	
c	うなじ・えりくび・くびすじ・くびねっこ	
	d ほんのくぼ	
c	えりあし	
a	胴・胴体	

b	かた	6 (6)
c	かたさき・かたぐち	
b	わき・わきのした	
c	わきげ	
b	むね〈重出〉・胸部・とむね・むなくそ	36(41)
c	むないた	
c	むなもと・むなさき	
c	ちち・ちぶさ・おっぱい・乳房・バスト・むね〈重出〉・ぼいん	
d	乳輪・乳暈	
d	ちくび・乳頭	
c	あばらぼね・肋骨	
c	むなげ	
b	はら・おなか・腹部・どてっばら・ぼんぼん	6(10)
c	はらのかわ	2 (1)
c	はらのすじ	1 (1)
c	みぞおち	
c	へそ・ほぞ	4 (7)
c	したはら・したっばら・下腹部	
d	臍下・丹田	
c	わきばら・よこはら・よこっばら・脾ばら	
b	せ・せなか・そびら	
c	肩胛骨・かいがらぼね	
c	せすじ	1 (2)
b	こし・腰間・ごごし	1 (1)
c	ウエスト	
b	しり・臀部・ヒップ・けつ・おいど	1 (1)
c	しりっぺた	
c	尾骶骨	
c	肛門・しりのあな・けつのあな	
b	また・こまた・股間・またぐら	
c	うちまた	
c	会陰・ありのとわたり	
b	陰部・性器・局部・かくしどころ・まえ	
c	陰毛・恥毛・ヘア・性毛	
c	男根・まら・一物	
d	陰茎・ペニス・ちんぼ・ちんぼこ・ちんぼこ・ちんこ・ちんちん・へのこ・むすこ	
e	亀頭・かりくび・かり	
d	陰囊・きんたま・ふぐり	
e	睾丸・きんたま	
c	女陰・陰門・まんこ・そそ・つび	
d	大陰唇	
d	陰裂	
d	陰核・クリトリス・さね	
d	小陰唇	

	d 臆・ヴァギナ	
a	て〈重出〉	1 (1)
	b みぎて・めて	
	b ひだりて・ゆんで	
	b うで・かいな・～腕	1 (1)
	c 二のうで	
	b ひじ	
	b てくび・こて	
	b て〈重出〉・おてて・～手	5 (5)
	c こぶし・拳固・拳骨	
	c ての甲	
	c てのひら・たなごころ・～掌	
	d て相・掌紋	
	e 生命線	
	e 運命線	
	c てさき	
	c ゆび・～指	2 (2)
	d ゆびさき	
	d ゆびのはら	
	e 指紋	
	d つめ	
	e こづめ	
	e あまかわ	
	d おやゆび・拇指	
	d ひとさしゆび・食指	1 (1)
	d なかゆび・たかたかゆび	
	d くすりゆび・べにさしゆび・べにつけゆび・無名指	
	d こゆび	
a	あし〈重出〉・あんよ	3 (3)
	b みぎあし	
	b ひだりあし	
	b 鼠蹊部	
	b もも・ふともも・大腿部	
	b ひざ・ひざこぞう・ひざっこぞう・ひざがしら・こひざ	4 (5)
	b ひかがみ	
	b すね・はぎ	
	c むこうずね・弁慶のなきどころ	
	c ふくらはぎ・こむら	
	c 三里	
	b あしくび	
	b あし〈重出〉	4 (4)
	c つまさき	
	c (あし)ゆび〈重出〉	
	d 〈下位区画省略〉	
	c あしの甲	

c くるぶし	
c かかと・きびす・くびす	
c あしのうら	
d つちふまず	
1. 3. 体表の構成要素	
け	1 (1)
みのけ・体毛	1 (1)
うぶげ	
はだ・皮膚・～膚	2 (2)
かわ	
しわ	2 (2)
けあな	
すじ・あおすじ・ちみち・静脈	2 (3)
ほくろ	
そばかす・しみ	
1. 4. 人体内部の構成要素	
のど〈重出〉	2 (2)
のどもと	
内臓・五臓・五臓六腑〈重出〉	
肺・肺腑	1 (1)
きも・どぎも	6 (7)
胃・胃の腑	
はらわた	2 (3)
血管	
神経	
芯・骨髄	2 (2)
肉	1 (1)
筋肉	
ほね・～骨	
関節・ふし	
1. 5. 1.2.～1.4.の複合した表現	
ほね-み〈重出〉	
はだ-み〈重出〉	
かた-み〈重出〉	
て-あし・あし-で・四肢	
あし-こし	
筋-骨	
1. 6. 人体が変形を受けた部分	
こぶ	
はれもの	
にきび・ふきでもの	
まめ・たこ	
あざ	
きず・むこうきず	

2. 人体からの産生物	
2. 1. 液体	
なみだ・紅涙	4 (4)
はな・はなみず・はなじる	1 (1)
つば・つばき・唾液・なまつば・かたず よだれ	3 (4)
痰	
あせ・ひやあせ	4 (4)
小便・おしっこ・小水・尿・いばり	
ちち・母乳・おっぱい	
精液・精	
経血	
愛液	
胃液・むしず・溜飲	2 (2)
げろ・へど ちへど	
ち・ちのけ・～血	5 (6)
出血	
鼻血	
喀血・吐血	
下血	
うみ・うみじる	
2. 2. 固体	
ふけ	
めやに・めくそ	
はなくそ	
みみくそ・みみあか	
はくそ・歯垢	
あか てあか つめのあか	
へそのごま	
大便・くそ・糞・うんこ・うんち	
かさぶた	
2. 3. 気体	
いき	6 (6)
はないき	1 (1)
こえ	3 (3)
げっぷ・おくび	
へ・おなら・ガス	1 (1)
3. 精神活動の座・主体	
気・気持ち	42 (43)
機嫌	2 (2)
気ぼね	1 (1)

気味・小気味	2 (3)
ここち	1 (1)
こころ・心頭	20 (20)
心胆	2 (2)
肝胆	1 (1)
たましい	2 (2)
むし	2 (2)
はらのむし	1 (2)

2. をとりあげたのは第1部と同様である。3. は「気」や「心」など現代人の目から見れば身体部位というより、抽象的な機能そのものとみられるものであるが、古くは身体内部に位置を占める具体的な存在と考えられてきたものであり、感情表現においては後述のように重要な位置を占めるため、今回特に加えたものである。

表1の分類の細部についていささか説明を加えると、人体を構成する部分構造やその部分の特異な機能に注目してとらえられた機能体とみられるものであっても、第一義的には人体の表面を区画して名称をあたえたものと見ることができるものは、1.2. に分類した。ただし、体表はすべて過不足なく分節・区画して名称が与えられているわけではなく、どちらの名でも呼べる箇所があったり、適切な名称の欠けている箇所も存在する。当該局所のみ名称があり、その周辺には特定の名称は存在しないというものももちろんある(個々の名称の指示範囲については第1部1.4. 参照)。1.3. には、1.2. と異なり、肌、毛のように体表全面に分布し、区画というより人体を構成する要素と考えるべきものをまとめた。

表1は現代共通語としては網羅的な語彙表をめざしているが、内臓名については、現在通行のものはほとんど解剖学上の専門用語であり、これらが普及したのはそれほど古いことではないことを考慮し、慣用句にあらわれるものに限って掲出した。

表1には、現在通用のものの範囲で、別称も尽くすようところがけた。俗語・卑語的表現(とさか、胸糞、けつなど)や育児語(ぼんぼん、あんよなど)などもあげたが、解剖学、経絡術、人相術などの専門用語は一般語としてももちいられるもの(鼠蹊部、人中など)以外は除外した。現在単独ではもちいられない古語的別称であっても慣用句(感情表現に限らない)にもちいられるもの(おとがい、ほぞ、こうべ、きびすなど)はあげた。方言的な表現の混入は極力避けたが、陰部の名称のように話し言葉での共通語形といえるものがなく方言差が激しいものについては、仮に東京方言形をあげたものもある。陰部にかかわるものでは、比喩的な言い換え表現が発達しているが、臨時的使用にとどまるものはとりあげなかった。

語種により次のように表記を区別した。

和 語：ひらがな 漢 語：漢字 外来語：カタカナ

表1では、語をあげることを原則としたが、次の例外を認めた。

1. 感情表現慣用句や熟語にもちいられているものに関り、形態素もあげた（非自立的な形態素（特に漢語形態素）には前に「～」を付した）。和語の慣用句と漢語の熟語との語形を超えた交替関係を重く見たからである。

はらわたがちぎれる ↔ 断腸のおもい

まゆをひらく ↔ 愁眉を展く

2. 形態的に1語とはいえない部位名称であっても、慣用句にもちいられるもの（面の皮、鼻の先、鼻の下、腹の皮、腹の筋）や頻用されるものに関り、単独の身体語彙と同等にあつかつて掲出した。

3. 慣用句にあらわれた限りで、属性をあらわす形容付きの複合語（青筋、紅涙、柳眉、冷や汗など）は全体を身体語彙とみとめ掲出したが、以下のものは単独の身体語彙と認定せず、身体部位名形態素のみを抽出した。

状況をあらわす形容付きの複合語：愁眉、怒髪；寝耳、向っ腹

動詞一対象の構造をもつ複合語：汗顔、切齒扼腕

複合語だが、身体部位名ではなく、うごき・行為の名であるもの：

浮き足、尻目、投げ首、二の足；鼻持ち、胸騒ぎ

表1では指示部位の広狭により階層をなしているものは、段階をわけて表示した。特に階層分化の顕著な1.2.では、階層レベルをa～eと明示した。本稿でも表2以下の諸表や付録の慣用句一覧では、狭い部位をあらわすものでも広い部位に統合して集計することはしていないので、広狭の階層関係はこの表1でご確認願いたい。

表1にみるように、日本語の身体語彙は、bレベルまでは全身ほぼ均等な表面積で網羅的な分節がおこなわれているが、cレベルになると日常語の範囲では一部で名無しの領域があらわれる（前膊や頸の側面など）ものの、頭部と指はもう一段階細かい分節がなされ、頭部のうち目・口はさらに細かく分節されている。知覚器官（とくに「目」）が集中し、音声器官（「口」）の開口部位でもあり、表情筋も発達した顔面頭部は人間の言語・非言語コミュニケーションにとってもっとも重要な身体部分であり、手指も人間の運動がもっとも繊細微妙なかたちであられる部分として注目せざるを得ない部分であるから、精密な分節がほどこされているわけである。

表1には、今回収集した慣用句に用いられた身体部位名の例数も表示した。括弧付きの数字は収集した慣用句の実数（付録の慣用句一覧の見出しの実数でもある）、括弧なしの数字は類似表現（付録の一覧で「類」という記号で相互に参照したものどうし）を統合して数えた数である（表2以下もおなじ）。日本語の慣用句には、「腹を抱える」と「おなかを抱える」、「腹が煮えかえる」と「腹が煮えくりかえる」のように慣用句を構成する語のう

ち一部を他の類義の語に交替させることができるものが大変多い。こうした類義表現の置き換え関係にある慣用句どうしは意味的にはなはだ近い関係にあるので、別の発想に基づく慣用句のように全くの別項目としてあつかうのでは当を得ないし、英語との量的な対照もできないので、以下の分析ではこの類義表現を統合した方の数（表中の括弧のない方の数）を用いてゆくことにする。

なお、本研究の主眼は英語との対照であり、「身体語彙を含む」慣用句という条件は、指示対象の人体は言語以前の所与として日本語話者にとっても、英語話者にとっても共通であることから選ばれたのであるから、表1では具体的な語形の違いを超えて指示部位ごとに集計している。

広範囲名と狭範囲名が同じ語形で示される場合(あたま、て、あし、めなど)、集計にあたっては、広範囲名としか解釈できないものだけを広範囲名にかぞえ、その他は狭範囲名としてかぞえてある。 (屋名池)

1. 3. 感情表現

1. 3. 1. 感情表現の範囲

日本語の場合も英語と同様、身体語彙慣用句の中から感情表現をなるべく広く抽出することを原則とした。ただし第一部で英語についてとりあげた「感情抑制の意志・働き」は感情の対極にある意志表現であると考え、今回の収集対象からは除外した。

1. 3. 2. 感情の分類枠

日英対照をおこなうため、基本的に英語の分類に用いられた感情の分類枠(第1部表3)を日本語にも用いた。しかし、この枠組み自体が英語の感情語彙によるものであるため、日本語に当てはめる際には単にその訳語を用いるということでは当然済まされない。各慣用句の表す感情をまず日本語で特定し、そこで用いた日本語の感情語彙を英語の分類枠に従って整理・統合したものが表2である。

「焦燥」は「心配」に統合。

「照れ」は「恥ずかしさ」に統合。

表2には対照のため、英語のラベルと、慣用句数（トークン別。第1部92ページ参照）もあわせ示した。

表2 日英語の感情分類の枠組と慣用句の分布

		本能的	110(134)		
		NATURAL	110		
	安全	23(30)		87(104)	危険
	SAFETY	32		78	DANGER
安心		1(1)	全般的	15(16)	恐怖

security	0	[general]	28	fear
平静	0 (0)	出来事による	18 (22)	困惑・興奮
composure	9	[inspired by events]	9	confusion
自信	0 (0)	予測	10 (12)	不安・緊張
confidence	16	[anticipated]	28	anxiety
安堵・弛緩	12 (15)	不測	22 (30)	驚き
relief	7	[unexpected]	12	alarm
満足	10 (14)	存在	22 (24)	不満・悔しさ・不機嫌
contentment	0	[existential]	1	discontent
個人的 133 (177)				
PERSONAL 129				
快 57 (77)			76 (100)	苦痛
PLEASURE 29			100	PAIN
喜び・おかしさ	13 (24)	全般的	8 (10)	悲しみ
joy	7	[general]	19	sorrow
感動	26 (31)	他者について	19 (30)	怒り
appreciation	1	[felt about others]	50	anger
好感	3 (3)	他者に向かって	0 (0)	嫌悪
love	5	[directed towards others]	4	hate
魅了	12 (16)	他者に向かって	12 (13)	反感
attraction	10	[directed towards others]	12	aversion
切望	0 (0)	他者によって	4 (4)	落胆
longing	3	[inspired by others]	3	disappointment
希望・期待	3 (3)	予測	21 (29)	心配・躊躇
hope	1	[anticipated]	11	worry
幸福	0 (0)	不測	12 (14)	憂鬱
happiness	2	[unexpected]	1	melancholy
社会的 61 (76)				
SOCIAL 135				
善 16 (20)			45 (56)	悪
GOOD 54			81	BAD
慈愛・同情	1 (1)	全般的	4 (5)	悪意
benevolence	12	[general]	1	malevolence
傾倒	0 (0)	他者に対して	4 (5)	あざけり
devotion	7	[expressed towards others]	0	derision
寛容	0 (0)	他者に向かって	6 (6)	渴望
generosity	2	[directed towards others]	14	craving
尊敬・感謝	3 (3)	自発的	6 (8)	侮り・不信
respect	6	[inspired within oneself]	28	contempt
温情	0 (0)	他者によって	0 (0)	羨望
cordiality	2	[inspired by others]	2	envy
厳粛	0 (0)	公式の場で	0 (0)	気まま
solemnity	1	[on formal occasions]	4	frivolity

快活 gaiety	0 (0) 0	非公式の場で [on informal occasions]	0 (0) 2	陰気 gloom
誇らしさ・得意 pride	11 (13) 7	自己認識 [one's self-image]	24 (31) 8	やましき・恥ずかしき・気兼ね shame
熱心 enthusiasm	1 (3) 17	存在 [existential]	1 (1) 22	無関心 indifference

1. 4. 慣用句の収集

現代の共通語にあって通用のものという条件の下、参考文献にあげた国語辞典、慣用句辞典、慣用句集、慣用句研究書から収集をおこなった。

収集した慣用句が変種をもつ場合は、辞書に掲載されていないものであっても網羅するようつとめた。(上野・眞田・屋名池)

2. 慣用句一覧の作成

2. 1. 見出し

日本語の慣用句には、対応する自動詞形と他動詞形をもつものが多い。本一覧で付した感情ラベル程度の粗い分析では、自動詞形と他動詞形はほぼおなじ意味をあらわすことになるし、自動詞形と他動詞形の機能のちがいは、英語ではあらわしわけられないので、こうした自他の例は一覧ではそれぞれ別項目とせず、日英語対照のための集計・分析の際(4.3.をのぞく)も1例としてカウントした。

前述のように、慣用句の一部を類義の表現にかえただけのペアも多いが、こうした語彙的なレベルで違いをもつものは慣用句一覧では統合せず、別項目としてあつかったが、[類]という表示で相互参照の便をはかった。

なお、身体部位名は見出しのその部分をゴチック体で示し、別に標示することはしていない。

2. 2. 感情ラベル

多義的な慣用句には複数の感情ラベルを付した。

まぎらわしいラベルについては以下のような基準を設けてラベルを付した。

「安心」と「安堵」：「安心」は状態として、「安堵」は心配などからの解放という変化としてとらえたもの。

「好感」と「慈愛」：「好感」は個人的な好ましい感情、「慈愛」は社会的な価値判断に基づいた好ましい感情。

「切望」と「渴望」：「切望」は個人的に好ましい感情、「渴望」は社会的に否定的評価を受ける願望。

「あざけり」と「侮り」：「あざけり」は積極的な見下げのきもち、「侮り」は相手を（軽く見て）無視するきもち。

2. 3. 用例

用例は実例と作例からなる。実例は今回新たに収集したもののほか、『日本語慣用句用例集』から再録したものが多い。この場を借りて感謝申し上げます。実例のあるものは優先的にあげたが、実例があっても、文脈が句義を明らかにするには不十分であるものは除外し、実例のえられなかったものとともに作例をあてた。（上野・眞田・屋名池）

3. 分析と考察——日本語における身体語彙感情表現慣用句の位置

日本語の身体語彙感情表現慣用句は大きく2種に分けることができる。

第1種：1人称者の感じている感情・感覚をそのままダイレクトに表現するもの。

「胸が躍る」「気が咎める」「心が痛む」「腹が立つ」「しんが疲れる」「骨身にこたえる」「頭に来る」「血が騒ぐ」「虫酸が走る」「鼻が高い」など

第2種：感情主体の外部からその感情・感覚を観察して、感情・感覚の外形的なあらわれの描写や言語上の虚構として間接的・分析的に表現するもの

「胸を躍らせる」「気を腐らせる」「色を失う」「肩をすぼめる」「頭から湯気をたてる」「目を剥く」「耳にたこができる」「鼻息があらい」など

3. 1. 第1種の身体語彙感情表現慣用句

まず、第1種の慣用句は、感情形容詞や感覚形容詞と同様の強い人称制限を有し、基本形で現在の状態をあらわすという特徴をもつ。この特徴はとりもなおさず、感情形容詞や感覚形容詞の特徴であるから、この類の慣用句は語彙的に貧弱な日本語の感情形容詞・感覚形容詞の体系を補完するものであり、日本語の感情表現体系のなかにあって、きわめて重要な位置を占めるものといえる。慣用句を語彙体系周辺の例外的な存在と考えてはならないのである。

第1種の慣用句には、語形上、顕著な特徴がある。身体部位名と述語部分にわけてのべると、まず身体部位名としては、外側から見えない身体内部の器官、または身体内部に想定された架空の器官（気、気骨、心、胸、肝、腹、はらわた、身、骨身、芯、背筋：表1の1.4.と3.）や、衣服によって外部から隠蔽されている部分（「身の毛」など）、外部から観察しうる器官であっても外形そのものではなくその内部的な感覚の座としてあつかわれるもの（「鼻につく」の「鼻」、「歯が浮く」の「歯」、「足がすくむ」の「足」など）、さらには身体からの産生物（息、血、胃液（「虫酸」・「溜飲」）：表1の2.）に限られる。つまり、他人が外部からそこに発現・表出している情動をうかがいしることができないところに限られているのである。

一方、述語部分は形容詞と自動詞に限られる。形容詞には制限がなく、属性形容詞であってもよいが、動詞は、自他対応形をもつ自動詞の場合でも、対応する他動詞はこのタイプにはならず、第2種となる（「息が詰まる」に対する「息を詰める」、「腹が立つ」に対する「腹を立てる」など）。一見他動詞形であっても、持ち主の受け身（「後ろ髪を引かれる」）や不可能表現（「～を腹に据えかねる」）は自動詞相当として、このタイプになる。

第1種の慣用句の構文・意味的な特性としては以下の点を上げることができる。述語部分が動詞であっても、

- ア 主語に総主としてあらわれる〔感情の主体〕が第1人称者に限られる。
- イ ガ格に〔身体部位〕か〔感情の契機〕をとる。
- ウ 第2種の表現である他動詞形と対応をもつものがある（総主が他動詞のガ格に、ガ格が同じくヲ格に対応する）。
- エ 基本形のまま、現在の状態をあらわす。

という点で、感情形容詞・感覚形容詞と同じ機能をもつものであることがわかる。こうした特殊な性格は慣用句を分解してしまってはあらわれない。述語部分が特殊だというわけではないことに留意されたい。

なお、前記の語形上の条件を満たしていないにもかかわらず、エの性格を有するものとして「耳を疑う」「目を疑う」などがあるが、これは述語部分「疑う」の思考述語としての特性によるものとみて別あつかいすべきであろう。

一方これとは反対に、語形的な条件を満たしながら、このタイプでないものもある。

- a. [驚愕] 血が凍る、魂が消える、腰が抜ける
- b. [緊張と弛緩] 気が張る、気が抜ける、気がゆるむ

[ストレスと解放]胸がつかえる、胸がつまる、胸が塞がる、胸が晴れる、胸のつかえがおりる

aは、驚愕というものが一瞬の衝撃であり、持続するのはその余韻であるから、完了形で表現されるのがふさわしいためであろう。一方、bの緊張とその弛緩、ストレスとそれからの解放は、日本語では文法的には「感情」扱いされていないと考えてよいのではなかろうか。

第1種の身体語彙感情表現慣用句は【興奮】【不安】【怒り】【反感】【感動】【憂鬱】【心配】【恐怖】【喜び】などをあらわすものが多いが、このうち前5者はそれをあらわす感情形容詞が存在していない感情である。このことから、この種の慣用句が感情形容詞の体系を補完しているものであることがわかる。

さて、第1種の感情表現慣用句で特に注目すべきは、自動詞形の述語部分をもつものの、他動詞形をもつ慣用句との対応である。先に述べたとおり、第1種の慣用句の述語部分の

自動詞形と形態的に対応する他動詞形を述語部分に持つ慣用句であっても、第1種の構文・意味的な特性は共有されず第2種になる。すなわち、自動詞形が主体の感情そのものを直接的に表現するのに対し、他動詞形は外形的な手がかりからそれと知ることができる他者の感情をあらわす。この点で、感情・感覚形容詞に対応する他動詞（「悲しい」に対する「悲しむ」、「うれしい」に対する「うれしがる」など）と平行的であり、また、外形的な身体運動を描写する他の第2種（後述）と連続している。日本語の感情表現慣用句が、自動詞形・他動詞形のペアをなすものが多いのは、感情を主体の内側から直接に表現する手段と、主体の外側から観察的に表現する手段がともに用意され役割を分担しているからである。

これは自他の対立としてはきわめて異例なものであるといわざるをえない。一般の自他対応動詞では、自動詞・他動詞は他動性の有無によって対立しているのだが、ここでは、まったく異なる機能分担がみられるからである。日本語動詞の自他対立におけるひとつのありかたとして、こうした対立についても十分考慮してゆく必要がある。

なお本研究の対象外であるが、感覚をあらわす身体語彙慣用句にも、第1種の感情表現慣用句と同様の構文・意味的な特性を有するものがある。

「目が回る」「ほっぺたが落ちる」「胸が焼ける」「膝が笑う」など

さらに、こうした慣用句だけでなく、感情動詞・感覚動詞の一部も、感情形容詞・感覚形容詞同様、主語に強い人称制限をもち、基本形で現在の状態として1人称者の主観をあらわす（ただし、総主の構文などはとらない）。

A 単純動詞・漢語サ変動詞

感情：「困る」「驚く」「たまげる」「呆れる」「白ける」
「興奮する」「緊張する」「閉口する」

B オノマトペから派生したサ変動詞

感情：「ホッとする」「ドキドキする」「ウンザリする」「ガッカリする」など
感覚：「ピリッとする」「ヒリヒリする」「ズキンズキンする」など

もちろん感情動詞・感覚動詞のうち、こうした第1種相当のものは少数派であり、大多数のものは第2種相当であるが、第1種・第2種間には身体語彙慣用句のような特殊な自他対立はなく、第1種は第2種としてももちいることができる。

第1種「困るよ。そんなこと急にいわれても。」

第2種「何そんなに困っているんだい？」（テイルを用いていることに注意）

ほぼ同義で第1種に対立する第2種があっても、そのちがいは語彙的なものととどまる。

[第1種] [第2種]

A 【興奮】 興奮する はしゃぐ・のぼせる

B	【不機嫌】	イライラする	ツンケンする
	【落胆】	ガッカリする	ガックリする

なお、Aの第1種は、第1種の身体語彙慣用句とおなじく、感情形容詞の存在しない感情をカバーするものである。

3. 2. 第2種の身体語彙感情表現慣用句

このタイプは、感情そのものの直接的な表現ではなく、いわばそれを感情主体の外部から観察して間接的・分析的に表現するものである。

構文・意味的には、人称制限を持たず、基本形が現在の状態を示すことはない（持続相にするならテイルをつけることが必要）点で、「喜ぶ」「悲しむ」や「驚く」「怒る」のような大多数の感情動詞と同類であるといえる。身体部位名をふくまない感情表現慣用句もすべてこのタイプに属する。

このタイプの慣用句を「文字通りには何を表しているのか」という点から分類してみると次のように3種類に分かれる。いずれも第1種の慣用句のような感覚そのものの表現ではないことがわかる。

A類 第1種の自動詞形に対応する他動詞形の慣用句。ただし、自他対応を持つものがすべて自：第1種、他：第2種A類となるわけではなく、自他ともに第2種の対も存在する。すべて「顔・頬（・顔色）」にかかわるB類のものである（「顔がほころぶ・顔をほころばせる」「頬が赤らむ・頬を赤らめる」「顔色が変わる・顔色を変える」など）。

B類 身体反応や動作を描写するもの

B1類 感情による生理的な身体反応の描写

「青くなる」「歯の根が合わない」「手に汗を握る」など

【恐怖】や【怒り】のような、表2の分類によれば本能的ないし個人的な感情は、顔、相好（表情）、顔色；額、眉、眉間；目、まなじり；頬；筋；小鼻；歯のような[顔面]に、生理的反応としてあらわれるものにとらえられ慣用句化されている。社会的な感情である【恥ずかしさ】も生理的反応を示すものとしてとらえられているのは興味深い。

B2類 感情に伴う無意識的な動作の描写

「頭を抱える」「口をとがらせる」「首を傾げる」など

無意識とはいえ生理的な反応ではないので、動作は、本能的感情以外の、【反感】【落胆】【熱心】などの個人的感情や社会的な感情の発現としてとらえられている。口と手（「指をくわえる」）、顎や髭と手（「顎／髭をなでる」）、首、肩などの[胸像]の範囲や、座った位置での膝（「膝を打つ」など）、前の頬にくらべやや広い範囲が注目されている。

B3類 社会慣習上感情をあらわす有意なしぐさとして定着したものの描写

「舌を出す」「手を合わせる」「眉に唾をつける」など

舌やさまざまに動く手が注目されており、範囲は更に広がって[上半身全面]におよぶ。ただし、活躍する手は自明の存在として、慣用句には表現されない(「あたまを搔く」「肩に唾をつける」「膝を打つ」など)。「やましき」「誇らしき」など社会的な感情は、しぐさをとおして、意図的に伝達されるものだけが慣用句化されているわけである。

B.1.、B.2.には一部を比喩的な表現に変えたもの(B.1.「顔に紅葉を散らす」、B.2.「肩を怒らす」)や程度を誇張した表現(B.1.「顎をはずす」「目玉が飛び出る」、B.2.「首を長くする」「ほぞをかむ」)を含み、B.1.～3.とも身体運動を伴わないばあいにも汎用化して使用するものを含む。感情表現ではない慣用句では、身体部位名を含んでいても、単なる部位名にとどまることは稀で、その部位の有する特定の機能(たとえば「手」なら《容器》「手に余る」、《支持物》「手に乗る」、《干渉の先鋒》「手が届く」、《相互のジョイント》「手を切る」など)に着目・限定した指示がおこなわれ、さらに適用対象を具体物から抽象物へ拡大させているのが普通であるが、このB類では、あくまで具体的・外形的な部位名にとどまっていることに留意したい。

B類の慣用句にあらわれる身体部位名は1. 2. でのべた日本語語彙体系そのものの偏りを反映しているだけでなく、独自の偏向を示している。胴体(頸部ふくむ)では表1でいえばb・cレベルの部位名が使われているが、bレベルであっても、背面や脇、股などはあらわれない。正面から見えない部分は慣用句にはもちいられていないのである。これはこの類の慣用句が、対者から見た身体の外観の言語的な描写であることを明らかに示している。

C類 言語上の虚構

C.1. 同様の感覚を引き起こすような刺激を想定したもの

「寝耳に水」「手を焼く」「肩の荷がおりる」など

C.2. 虚構の感情表出メカニズム

「喉から手が出る」「臍が茶を沸かす」など

C.3. 社会的な通念・俗信などから導かれたもの

「屁とも思わない」(←屁はマイナス以下の価値)

「旋毛を曲げる」(←ひねくれ者は旋毛が曲がっている)

「足を向けて寝られない」(←足は不浄だから相手に向けるのは不敬・無礼)

これらは身体運動ではないから、身体部位名は必須ではなく、現にC.1.、C.2.には身体部位名を含まない感情表現慣用句がある(C.1.「煮え湯を飲まされる」、C.2.「堪忍袋の緒が切れる」)。(屋名池)

4. 分析と考察——日英語の対照

4. 1. 身体語彙別の感情表現

表3は、日本語慣用句のなかの身体語彙がどのような感情表現に使われたかを示すものである。例えば「息」は「驚き」、「安堵・弛緩」、「憂鬱」の例が各1例ずつ、「緊張」の例が3例で、合計6例があったことを示している。

この表では、身体部位別というより身体語彙別の整理をおこなっており、表1のような、同一語形での大区画名・小区画名の区別（頭・手・足・目などの場合）や体表の区画と身体内部の構成要素との区別（喉などの場合）はしていない。

複数の身体部位名称をふくむ慣用句は身体部位名称ごとに、複数の感情ラベルを持つ慣用句は感情ラベルごとに重複して数えたので、表3および、次の表4であげる数の総計は慣用句の総数より多く、表1・表2とも一致しないことに注意されたい。

また、表3・表4は日英語を対照するためのものであるから、感情名は表2にしたがって統合したものによって集計した。

表3 身体部位別の感情表現分布

顎（頤）	おかしさ 1(3) 誇らしさ・得意 1(1)
足	感謝 1(1) 恐怖 1(1) 興奮 1(1) 心配 1(1) 躊躇 1(1) 憂鬱 1(1) 喜び 1(1)
汗（冷や汗）	緊張 1(1) 恐怖 1(1) 恥ずかしさ 1(1) やましさ 1(1)
頭（とさか）	怒り 2(3) 興奮 1(1) 困惑 1(1) 心配 3(3) 尊敬 1(1) やましさ 1(1)
胃液（虫酸・溜飲）	反感 1(1) 満足 1(1)
息	驚き 1(1) 緊張 3(3) 弛緩 1(1) 憂鬱 1(1)
腕	悔しさ 1(1)
顔（面の皮）	あざけり 1(1) 安堵 1(1) 怒り 1(1) 驚き 2(2) 恥ずかしさ 5(6) 反感 1(1) 不満 2(2) 誇らしさ・得意 1(2) やましさ 4(7) 憂鬱 3(4) 喜び 1(1)
顔色・相好・表情	怒り 2(2) 驚き 4(5) 恥ずかしさ 1(1) 不機嫌 1(1) 喜び 1(1)
肩	安堵 2(2) 誇らしさ・得意 2(2) やましさ 1(1) 落胆 1(1)
肩身	誇らしさ・得意 1(1) やましさ 1(1)
髪（後ろ髪）	怒り 2(3) 不満 1(1)
肝胆	心配 1(1)
気（気持ち）	安堵 1(1) 安心 1(1) 驚き 1(1) 気兼ね 2(2) 緊張 1(1) 好感 1(2) 興奮 3(3) 弛緩 3(3) 躊躇 2(2) 心配 7(7) 反感 2(2) 不機嫌 1(1) 不満 1(1) 満足 3(3) 魅了 2(3) 無関心 1(1) やましさ 3(3) 憂鬱 5(5) 落胆 1(1)
機嫌	不機嫌 1(1) 満足 1(1)
気骨	気兼ね 1(1)
気味（小気味）	恐怖 1(1) 満足 1(2)
肝（度肝）	驚き 2(3) 感動 1(1) 恐怖 1(1) 心配 2(2)
口	驚き 1(1) 不満 1(1)
唇	不満 2(2)

首 (小首)	期待 1(1) 困惑 3(4)
毛	恐怖 1(1)
声	驚き 1(1) 不満 1(1) 喜び 1(1)
心地	恐怖 1(1)
心 (心頭)	怒り 1(1) 感動 6(6) 悲しみ 1(1) 興奮 1(1) 困惑 1(1) 心配 3(3) 不安 1(1) 満足 1(1) 魅了 2(2) 憂鬱 1(1) 喜び 2(2)
腰	驚き 1(1)
骨髄	悔しさ 1(1)
舌	あざけり 1(1) 驚き 1(1) 不満 2(2) やましき 1(1)
食指	渴望 1(1)
尻	恥ずかしき 1(1)
皺	心配 2(2)
芯	緊張 1(1)
心胆	恐怖 2(2)
筋 (青筋)	怒り 1(2)
背筋	恐怖 1(2)
魂	驚き 1(1) 魅了 1(1)
血 (血の気)	恐怖 2(2) 興奮 3(4)
血道	魅了 1(1)
唾 (生唾・固唾)	渴望 1(1) 緊張 1(1) 不信 1(2)
旋毛	不機嫌 1(1)
手	渴望 1(1) 感謝 1(1) 緊張 1(1) 困惑 1(1) 心配 1(1) 喜び 1(1)
涙 (紅涙)	悲しみ 2(2) 感動 1(1) 悔しさ 1(1)
肉	興奮 1(1)
喉	渴望 2(2)
歯 (歯の根・歯牙)	悔り 1(1) 恐怖 1(1) 悔しさ 2(2) 反感 1(1)
肺 (肺腑)	感動 1(1)
肌	恐怖 1(1) 反感 1(1)
鼻 (鼻の先)	あざけり 1(1) 悔り 1(2) 反感 2(2) 誇らしき・得意 3(3) 落胆 1(1)
小鼻	不満 1(1) 誇らしき・得意 1(1)
洩	悔り 1(1)
鼻息	誇らしき・得意 1(1)
鼻毛	魅了 2(3)
鼻の下	魅了 1(2)
腹 (おなか・腹の皮・腹の筋)	怒り 3(4) おかしき 2(7) 不機嫌 1(1) 満足 1(1)
腹の虫	怒り 1(2)
腸	怒り 1(3) 悲しみ 1(1)
髭	誇らしき・得意 1(1)
膝 (小膝)	熱心 1(2) 満足 1(3)
額	怒り 1(1) 心配 1(3)
尻	悔り 1(1)
臍 (ほぞ)	あざけり 1(2) おかしき 1(3) 悔しさ 1(3) 不機嫌 1(1)
頬	怒り 1(1) 興奮 1(2) 恥ずかしき 1(2) 不満 1(1)
骨身	感動 2(2)

眉 (柳眉)	安堵 1(4) 怒り 2(3) 心配 2(3) 反感 1(2) 不信 1(2) 憂鬱 1(1)
身	悲しみ 1(1) 感動 1(1) 慈愛 1(1) 熱心 1(1) 魅了 1(2) やましき 2(2)
眉間	心配 1(1)
身の毛	恐怖 1(1)
耳	驚き 2(2) 感動 1(1) 反感 1(1) やましき 1(1)
虫 (腹の虫のぞく)	反感 1(1) 不機嫌 1(1)
胸 (と胸・胸糞)	安堵 2(2) 驚き 1(2) 悲しみ 3(4) 感動 15(15) 期待 1(1) 興奮 5(5) 心配 1(1) 不安 2(3) 不満 1(1) 誇らしき・得意 1(1) 満足 2(2) 魅了 1(1) 憂鬱 1(1) 喜び 2(2)
目	悔り 1(1) 怒り 2(2) 驚き 6(8) 渴望 1(1) 感動 1(1) 好感 1(1) 反感 1(1) 魅了 2(2) 喜び 1(2) 落胆 1(1)
目玉	驚き 1(1)
目頭	悲しみ 1(1)
目尻 (まなじり・目くじら)	
	怒り 2(3) 喜び 1(1)
指	渴望 1(1) 期待 1(1)

日本語感情表現慣用句に使用された身体語彙を多い順に挙げると、「気 (気持ち)」42、「胸 (と胸・胸糞)」36、「心 (心頭)」20、「顔 (面の皮)」23、「目」15、「頭 (とさか)」9となる。このなかで圧倒的多数の「気」は英語には直接対応するもののない日本語独特の表現だが、残りは英語でもっとも使用頻度の高かった heart, eye, face, head に対応する。感情の座とされる心・胸 heart と、感情をはっきりと映し出す目 eye, 顔 face, 頭 head の使用度が高いということは日英語に共通した現象である。

日本語に特徴的である「気 (気持ち)」は、19種類の感情表現に用いられているが、そのうち6種は本能的な正の感情である【安心】、【安堵・弛緩】、【満足】と、個人的な正の感情である【好感】、【魅了】を表現し、残りは本能的な負の感情である【驚き】、【興奮】、【緊張】、【不満・悔しき・不機嫌】、個人的な負の感情である【反感】、【落胆】、【心配・躊躇】、社会的な負の感情である【やましき・気兼ね】、【無関心】と広く関わっている。

英語で head の次に多く用いられているのは back だが、日本語でこれに対応する背、背中をあらわす語では「背筋」の例が一例あるのみである。また、日本語で「頭」に次いで多く用いられているのが「鼻 (鼻の先)」8、「腹 (おなか・腹の皮・腹の筋)」7、「顔色・血色」5であるが、「腹」「鼻」に対応する英語の stomach, nose は慣用句にも用いられてはいるもののそれほど例の数は多くない。

日英語の感情表現慣用句の特徴が現れていると考えられるものに、buttocks と「尻」がある。英語の buttocks は全体で八番目に用例の多い身体部位となっているのに対し、日本語の「尻」は1例しか出てきていない。その理由の一つに英語の感情表現慣用句は砕けた日常表現であるのに対し、日本語の場合はむしろ書き言葉の中に使われるような例が多い

ことがあげられよう。また、英語では背、尻といった後ろ側の部位も感情を表すのに対し、日本語では専ら前面の部分が感情判断にかかわっているともいえる。

4. 2. 感情表現別の身体語彙

表4は日本語慣用句に表現された感情の種類ごとに、どのような身体部位が用いられたか使用回数と共に示したものである。

表4 感情別の身体部位分布

あざけり	顔1(1) 舌1(1) 鼻1(1) 臍1(2)
侮り	歯1(1) 鼻1(2) 洩1(1) 屁1(1) 目1(1)
安心	気1(1)
安堵	顔1(1) 肩2(2) 気1(1) 眉1(4) 胸2(2)
怒り	頭2(3) 色1(1) 顔 髪2(3) 心頭1(1) 血相1(1) 筋1(2) 腹3(5) 腹の虫1(2) 腸1(2) 額1(1) 頬1(1) 眉2(3) 目2(2) 目尻2(3)
おかしさ	顎(頤)1(3) 腹2(7) 臍1(3)
驚き	息1(1) 顔2(2) 顔色4(5) 気1(1) 肝(度肝)2(3) 口1(1) 声1(1) 腰1(1) 舌1(1) 魂1(1) 耳2(2) 胸(と胸)1(2) 目6(8) 目玉1(1)
渴望	食指1(1) 唾1(1) 喉2(2) 目1(1) 指1(1)
悲しみ	心1(1) 涙2(2) 腸1(1) 身1(1) 胸3(4) 目頭1(1)
感謝	足1(1) 手1(1)
感動	肝1(1) 心6(6) 涙1(1) 肺腑1(1) 骨身2(2) 身1(1) 耳1(1) 胸15(15) 目1(1) 目頭1(1)
気兼ね	気1(1) 気骨1(1)
期待	首1(1) 胸1(1) 指1(1)
恐怖	足1(1) 汗1(1) 気味1(1) 肝1(1) 毛2(2) 心地1(1) 心胆2(2) 背筋1(2) 血2(2) 歯1(1) 肌1(1) 胸1(1)
緊張	汗1(1) 息3(3) 気1(1) 芯1(1) 唾1(1) 手1(1)
悔しさ	腕1(1) 骨髄1(1) 涙1(1) 歯2(2) 臍1(1)
好感	気2(2) 目1(1)
興奮	足1(1) 頭1(1) 気3(3) 心1(1) 血2(3) 頬1(2) 胸4(4)
困惑	頭1(1) 首3(4) 心1(1) 手1(1)
慈愛	身1(1)
弛緩	息2(2) 気3(3)
心配	足1(1) 頭3(3) 肝胆1(1) 気7(7) 肝2(2) 心3(3) 皺2(2) 手1(1) 額1(3) 眉2(3) 眉間1(1) 胸1(1)
尊敬	頭1(1)
躊躇	足1(1) 気2(2)
熱心	膝1(2) 身1(1)

恥ずかしさ	顔 5(6) 顔色 1(1) 尻 1(1) 頬 1(2)
反感	胃液 1(1) 顔 1(1) 気 2(2) 歯 1(1) 肌 1(1) 鼻 2(2) 眉 1(2) 耳 1(1) 虫 1(1) 目 1(1)
不安	心 1(1) 胸 3(4)
不機嫌	機嫌 1(1) 気持ち 1(1) 旋毛 1(1) 臍 1(1) 虫 1(1) 腹の虫 1(1)
不信	眉 1(2)
不満	顔 2(2) 髪 1(1) 気 1(1) 口 1(1) 唇 2(2) 声 1(1) 小鼻 1(1) 舌 2(2) 頬 1(1) 胸 1(1)
誇らしさ・得意	顎 1(1) 顔 1(2) 肩 2(2) 肩身 1(1) 鼻 3(3) 小鼻 1(1) 鼻息 1(1) 髭 1 (1) 胸 1(1)
満足	胃液(溜飲) 1(1) 気 3(3) 機嫌 1(1) 気味 1(2) 心 1(1) 腹 1(1) 膝 2(4) 胸 1(1)
魅了	気 2(3) 心 2(2) 魂 1(1) 血道 鼻の下 1(2) 鼻毛 2(3) 身 1(2) 胸 1(1) 目 1(1)
無関心	気 1(1) 尻 1(1)
やましさ	汗 2(2) 頭 1(1) 顔(面) 4(7) 肩 1(1) 肩身 1(1) 気 3(3) 舌 1(1) 身 2(2) 耳 1(1)
憂鬱	足 1(1) 息 1(1) 顔 3(4) 気 5(5) 心 1(1) 眉 1(1) 胸 1(1)
喜び	足 1(1) 顔 1(1) 相好 1(1) 声 1(1) 心 2(2) 手 1(1) 胸 2(2) 目 2(3)
落胆	肩 1(1) 気 1(1) 鼻 1(1) 目 1(1)

身体部位を使って表現された感情のトップは日本語の場合【感動(appreciation)】26で、【やましさ・恥ずかしさ・気兼ね(shame)】24、【不満・悔しさ・不機嫌(discontent)】22、【驚き(alarm)】22、【心配・躊躇(worry)】21、【怒り(anger)】19、【困惑・興奮(confusion)】18と続く。英語では anger が一番多く負の感情が目立つのだが、日本語では【感動】、【喜び・おかしさ】といった正の感情も多く表れていることが特徴である。しかし全体を見わたしてみると、日本語においても総数304のうち、正の系列は96(32%)、負の系列は208(68%)と圧倒的に負の方が多く、英語の場合も総数374のうち、正に115(31%)、負に259(69%)であるから、日英語ともに負の軸に分布する感情表現が正の場合の2倍以上の比率を占めており、この点は同様なのである。

次に、表2の感情分類の枠組みを参照し、本能的(NATURAL)、個人的(PERSONAL)、社会的(SOCIAL)という領域別に感情表現を眺めてみると、英語では NATURAL (110)、PERSONAL(129)、SOCIAL(135)の順に感情表現が増え、人間の社会性に根ざす感情がもっとも多く表現されるのに対し、日本語では本能的領域110、個人的領域133、社会的領域61という分布となり、個人的感情に基づく表現がもっとも多くなっている。

さらに、各領域の中で一例も現れなかった感情を見てみると、日本語の表現では、本能

的領域のなかでは【平静】と【自信】、個人的領域では【嫌悪】、【切望】、【幸福】、社会的領域では【傾倒】、【寛容】、【温情】、【羨望】、【厳粛】、【気まま】、【快活】、【陰気】であるが、これは平静であって当たり前、嫌悪や切望、羨望などの感情はおもてにあらわすべきでないという日本の伝統的な道德観念、社会通念の反映とみるべきであろう。英語で1例も現れなかったのは、NATURALの領域の security と contentment、SOCIALの領域の gaiety のみであり、日英語ともに例を見なかったのは【快活(gaiety)】である。

日本語の社会的感情をあらわす表現が【やましき・恥ずかしき・気兼ね(shame)】に集中していることは興味深い。一方、英語の場合には社会的感情をあらわす例は多岐にわたっているが、表現度の高いものには contentment (侮り・不信)、indifference (無関心)、enthusiasm (熱心) がある。

社会的感情表現が集中している【やましき・恥ずかしき・気兼ね】には、「汗」、「頭」、「顔」、「頬」、「肩」、「肩身」、「気」、「気骨」、「舌」、「見」、「耳」といった様々な身体部位名が用いられるが、これに対応する英語の感情表現である shame には buttocks, eye, face, head, leg が用いられており、日英語で重なる身体部位名は限られている。「気」、「気骨」などは日本語に特徴的であり、buttocks, leg が用いられる点は英語に特徴的であるといえよう。

本能的(NATURAL)、個人的(PERSONAL)、社会的(SOCIAL)の3領域を、それぞれ [安全 (SAFETY) ↔ 危険(DANGER)]、[快(PLEASURE) ↔ 苦痛(PAIN)]、[善(GOOD) ↔ 悪(BAD)] の正・負の軸に二分してみると、日本語では、正の場合には個人的57、本能的23、社会的16となり、個人的領域に顕著に多く、特に【感動(感銘)】26と【喜び・おかしき】13の表現度が高い。負の場合には本能的87、個人的76、社会的45となり、本能的領域が上位に来る。一方、英語では、SOCIAL 54、NATURAL 32、PERSONAL 29となり、SOCIALの領域に例が多いが、負の場合には PERSONAL 101、SOCIAL 81、NATURAL 78となり、PERSONALの領域が上位となる。これはすべての感情の中でもっとも表現度の高い anger 50に負うところが大きい。(上野・眞田)

4. 3. 慣用句のタイプ

感情に伴う身体反応はおもに自律神経によってコントロールされているのだから、人間であれば、本来、人種や使用言語による差はないはずである。しかるに、身体反応のどの面に着目し、いかなる表現で固定するかは言語によってちがうので、言語差が生じているのである(第1部1.4.参照)。それどころか、同じ言語内の表現であり、同様の身体反応を表現するものであっても、感情ごとにことなった表現を固定することもまれではない。「胸が轟く」「胸が高鳴る」はいずれも交感神経の作用で心拍が強くなり早くなることを表現しているが、前者は不安の表現、後者は興奮の表現である。また、発汗作用を描写する「手に汗

を握る」「冷や汗をかく」でも、前者は緊張によるもの、後者は恐怖や恥ずかしさによるものとして使い分けがある。感情表現慣用句に表現される有意しぐさも言語同様、恣意的な記号であり、比喩や誇張、言語上の虚構なども、文化的な参照体系にかかわるものであるから、文化を異にする社会で異なる発達を示すのはいうまでもない。

3節で日本語慣用句を対象におこなった分類と、第1部3.3.で英語慣用句を対象におこなわれた分類を量的に対照してみよう。日本語の第1種に相当する慣用句は全体の21%あるが、これに相当するものは英語には存在しない。一方、第1部の分類の第1・第2のタイプは、動作・しぐさ・表情を基にしたものとその比喩的・誇張的用法であるが、3節の分類の第2種A類・B類にあたる。この種のもは英語慣用句の41%を占めるのに対し、日本語では、実にその74%が属する。英語の第3タイプ、伝統的な定義にかなう狭義の慣用句は日本語では第2種C類に相当するが、英語の58%に対し、わずか6%しかない。

身体語彙感情表現慣用句の範囲に限定してのことであるが、日本語は、感情を直接表現するという機能の上からはきわめて特殊な慣用句をもっているものの、慣用句の構成はごく透明であるのに対し、英語は、文字通りの意味と実際上の意味の乖離の大きい、狭義の慣用句をもっている、厳しい人称制限を有する狭義の感情表現慣用句はもっていないということができよう。(上野・屋名池)

5. むすび

本研究は、第1部英語における身体語彙感情表現に続く第2部であり、収集した日本語の身体語彙感情表現慣用句について、1)表現に使われた身体語彙を日本語の身体語彙の中で位置づけ(表1参照)、2)第1部で用いた感情分類の枠組を基に感情ラベルを付し、感情分類の枠組内における分布を明らかにし(表2参照)、3)身体部位別に感情表現を分類し(表3参照)、感情別にどのような身体部位が表現に用いられているかを見(表4参照)、意味・構文の観点から慣用句のタイプを類別した。さらに、これらを第1部で得た英語の身体語彙感情表現の分析結果と比較対照し、共通点と相違点を明らかにすることを試みた。これらの成果が英語教育ならびに日本語教育のための基礎資料として用いられることを望みたい。

なお、本研究に用いた日本語の慣用句は「日本語の身体語彙感情表現慣用句一覧(五十音順)」として、例文の英訳を付し、本報告末に付録として掲げた。(上野)

参考文献

- 『岩波英和大辞典』中島文雄編 岩波書店 1970年
『学研国語大辞典』金田一春彦・池田弥三郎編 学習研究社 1978年
『角川類語新辞典』大野晋・浜西正人編 角川書店 1981年
『からだ言葉の事典』日本語表現研究会編 PHP 研究所 1995年
『感情表現辞典』中村明編 六興出版 1979年
『慣用句の意味と用法』宮地裕編 明治書院 1982年
『擬声語擬態語慣用句辞典』白石大二編 東京堂出版 1982年
『研究社新英和大辞典 第5版』小稲義男編 研究社 1980年
『研究社新和英大辞典 第4版』増田綱編 研究社 1974年
『広辞苑 第四版』新村出編 岩波書店 1991年
『国語慣用句辞典』白石大二編 東京堂出版 1969年
『国語慣用句大辞典』白石大二編 東京堂出版 1977年
『知っておきたい慣用句小辞典』三省堂 1979年
『小学館ランダムハウス英和辞典』小学館 1974年
『大辞林』松村明編 三省堂 1988年
『日本語慣用句用例集』宮地裕編 大阪大学文学部 1985年
『日本国語大辞典』日本大辞典刊行会編 小学館 1972-1976年
『日本語における固定的複合表現』首藤公昭編 文部省科学研究費報告書 1989年
『分類語彙表』国立国語研究所編 秀英出版 1964年
『裸体のことば』アスファルト・ブックス編集部編 河出書房新社 1986年
『リーダース英和辞典』松田徳一郎監修 研究社 1984年
『類語辞典』広田栄太郎・鈴木棠三編 東京堂出版 1957年

付録 日本語の身体語彙感情表現慣用句一覧（五十音順）

【ア行】

開いた口が塞がらない（驚き）

俊介はばかりしさのあまり、あいた口がふさがらないような気がした。（開高健『パニック』）

Shunsuke felt that it was so absurd that he didn't know what to do.

青くなる（驚き）

調子はおだやかだが、これは威迫である。蓑田は青くなった。（海音寺潮五郎『西郷と大久保』）

The tone of what he said was calm, but threatening, and so Minota turned pale.

青筋を立てる（怒り） [類] 額に筋を立てる

持前の重吉らしくもない癩癩に青筋を立てて、……物凄い形相で立ち上る……（壺井栄『暦』）

Quite beside himself, Jukichi stood livid with rage....

顎をなでる（誇らしさ・得意）

「信濃さんは…すごく女にお持てになるんですね」「何、そうでもないさ」浩太郎は、わざと顎を撫ぜるようないい方をしておいて（源氏鶏太『男と女の世の中』）

“Mr. Shinano, women find you attractive, don't they?” “Oh, not all that much,” he replied, with pride written across his face....

顎をはずす（おかしさ） [類] おとがいをはずす

このあいだは落語をきいてひさしぶりに顎をはずしたよ。

After all those years, I listened to the rakugo and laughed my head off.

足が重い（憂鬱）

おわびにうかがわなくてはと思ったが、なんとも足が重かった。

I thought I should apologize, but I was reluctant.

足がすくむ（恐怖）

その日（＝関東大震災の日）観測当番だった三浦は、足もすくむような大揺れの中で、測器を調整しながら正確な観測を続けたのである。（柳田邦男『空白の天気図』）

Mr. Miura, on duty at the hour that the Great Tokyo Earthquake struck, was very frightened, but he was able to adjust the seismograph properly and continue making accurate observations.

足が地に付かない（興奮）

彼は初めてのデートにそわそわして足が地に着かない。（『E.SEID』）

Because this was going to be his first date, he was made thoroughly uncomfortable by worry.

足を向けて寝られない（感謝）

就職の際には大変お世話にあいなり、あなたには足を向けては寝られません。

I so appreciate the help you gave me in job hunting that I could never do the slightest thing that would show my disrespect.

頭が痛い・頭を痛める（心配）

二年後の国際医学総会のことを考えますと、頭が痛くなりますわ。(山崎豊子『白い巨塔』)
Whenever the thought of the up-coming International Medical Conference comes to mind, even though it's two years off, I get a headache.

頭が下がる (尊敬)

ポープさんの気前のいいのにはあたまがさがったよ。(三島由紀夫『禁色』)

Feeling the deepest gratitude for Mr. Pope's generosity, I couldn't help but tip my hat to him.

頭から湯気をたてる (怒り)

あいつは気が短くて、すぐ頭から湯気をたてる。

He was so short tempered that it took very little to make him anger.

頭に来る (怒り) [類] とさかに来る

かっとならば逆上する。……ちょっとした妻のことばもすぐ頭にきて、手を振りあげてしまう。(島尾敏雄『死の棘』)

I found myself so enraged that even the most innocence remark made by my wife would make me hit her.

頭に血がのぼる (興奮)

白井義男とタド・マリノの世界タイトルマッチの放送を聴いてすっかり頭に血が昇って、……俺もボクサーになろうかと思った。(三浦哲郎『結婚』)

After hearing the broadcast of the world title match between Shirai Yoshio and Tad Marino, I got really excited and wanted to become a boxer.

頭を痛める (心配) →頭が痛い

頭を抱える (心配)

その(=工員が、特高係ノ刑事ニ逮捕サレタトイウ) 報せを警察からうけた玉井所長は頭をかかえた。(吉村昭『戦艦武蔵』)

Director Tamai was most upset by the news he received from the police.

頭を掻く (やましき)

「こんな失敗、めったにしないんですけどねえ」と頭を掻いた。

He was so embarrassed that he had to say, "It's rare for me to make such a blunder."

頭を悩ます (心配) [類] 心を悩ませる

二十代、三十代主婦とも、今晚のおかずは何にしようといった「献立づくり」に最も頭を悩ましている。(『日本経済新聞』)

House wives in their twenties and thirties worry most about what dishes they should prepare for their husbands.

頭を捻る (困惑)

問題の解決にああでもない、こうでもない頭をひねった。

Our constant worry was whether we should do this or do that to solve the problem.

合わせる顔がない (やましき) [類] 顔が合わせられない

黒田家にも実家にも合わせる顔がございません。(曾野綾子『華やかな手』)

I lacked the courage to face either the Kurodas or my own family.

いい面の皮だ (やましき) (あざけり)

人の嫁さんに惚れていたなんていい面の皮だ。

Having fallen in love with another man's wife, I felt totally ashamed.

怒り心頭に発する (怒り)

返すがえすの恩知らずのふるまいに怒り心頭に発した。

I was furious with him for having forgotten his obligations.

息が詰まる (憂鬱)

いわゆる良妻賢母型の奥さんだと、息がつまりそうになっていやだという男性もいるし、
(筒井康隆『狂気の沙汰も金次第』)

There are men who don't want women who are good wives or mothers because they feel they'll be suffocated by them and....

生きた心地がしない (恐怖)

乗った飛行機がハイジャックにあった時は、まったく生きた心地もしなかったよ。

I had the feeling that I was somehow not really alive when the plane I'd taken was hijacked.

息を凝らす (緊張)

彼女は息を凝し、彼の腕を握ってその方に大きな眼を見張っていた。(福永武彦『忘却の河』)

Feeling the tension, she grasped his arm and stared straight ahead.

息を殺す (緊張)

息を殺して待て居たが、いっかな二人はやって来ない。(谷崎潤一郎『少年』)

I had been waiting with bated breath, but for some reason or other the two failed to show up.

息をつく (弛緩)

人が人間らしく息を吐くのは、バラック同然の小さい自分の家の中だけなのだ。(大仏次郎『風船』)

It was only that small barracks-like house that belonged to him that allowed him to breathe as a human being.

息を詰める (緊張)

物陰でじっと息を詰めて、追っ手のようすをうかがった。

Secreted there, the hider watched his pursuer with intensity.

息を呑む (驚き)

北は、市街地の方を見下ろして、アッと息を呑んだ。広島街が全く姿を変えていたのだ。
(柳田邦男『空白の天気図』)

Mr. Kita, looking down at the city, was astonished. Hiroshima was totally transformed.

色を失う (驚き)

南未亡人は色を失って、女を見上げた。(三島由紀夫『禁色』)

The widow Minami looked up at the other woman in total astonishment.

色をなす (怒り)

別れ話もちだされた女は色をなして男をなじった。

When the woman learned they were to part, she placed the blame on him with harsh words.

浮かない顔をする (憂鬱)

その首尾はまずまずのはずであった。それなのに、本宮はなぜ浮かぬ顔をしているのか。
(城山三郎『毎日が日曜日』)

Things had gone quite well, I thought, and wondered why Motomiya was so dissatisfied.

浮き足立つ (心配)

さらに激しい砲撃が始まるとのうわさが市内にひろがって、市民が浮き足だっている…… (『朝日新聞』)

When the rumor spread though the town that there would be a severe bombardment, citizens panicked....

後ろ髪を引かれる (不満)

何だか後ろ髪を引かれるようで、……一寸後を振り向いて見たら、母はまだ門前に悄然と立っていた。(二葉亭四迷『平凡』)

I felt unable to leave, and looking back I saw my mother still standing by the gate all alone.

恨み骨髓に徹する (悔しさ)

うちのやつと結婚するとき、あいつに横槍を入れられたことは生涯忘れない。恨み骨髓に徹してますよ。

I'll never forget that when my wife and I got married, he raised an objection.

大きな顔をする (誇らしさ・得意) [類] でかい顔をする

自分は一度この家を出た人間なのだから、そう大きな顔はできないが、(山本有三『真実一路』)

Having already moved out of the house, I couldn't help but feel uncomfortable there but....

おとがいを解く (おかしき) [類] おとがいをはずす

江戸の滑稽本とはいっても、今読めば、すぐ頤を解くというわけにはゆかない。

When one tries to read the humorous fiction of the Edo Period, one is not immediately able to find them funny.

おとがいをはずす (おかしき) [類] 顎をはずす・おとがいを解く

驚きの目を見張る (驚き) [類] 目を見張る

おなかをかかえる (おかしき) [類] 腹を抱える

おもてを変える (驚き) [類] 顔色を変える・血相を変える

おもてを伏せる (恥ずかしさ)

管理責任を追及されれば、おもてを伏せるしかなかった。

When they said that I was administratively responsible, I was ashamed and bowed my head.

【カ行】

顔色が変わる (驚き) → 顔色を変える

顔色を変える・顔色が変わる (驚き) [類] 血相を変える・おもてを変える

顔が赤くなる (恥ずかしさ) → 顔を赤くする

顔が赤らむ (恥ずかしさ) → 顔を赤らめる

顔が合わせられない (やましき) [類] 合わせる顔がない

卒業研究がすこしも進んでいないので、指導教官には顔が合わせられない。

Since his research had come to all but a standstill, he was ashamed to see his advisor.

顔が曇る (憂鬱) →顔を曇らせる

顔が暗くなる (憂鬱) →顔を暗くする

顔がこわばる (驚き)

得意満面で記者会見に臨んだ代議士も、身内の選挙違反容疑について質問されると顔をこわばらせた。

The diet member came to the press conference proudly, but when he was asked about his family's involvement in election fraud, his face darkened.

顔が晴れる (安堵)

失踪した夫の負債については妻に返済の責任はないと説明されて、婦人はやっと顔が晴れた。

The wife, when she was told that she had no responsibility for her husband's debts, was greatly relieved.

顔がほころぶ (喜び) →顔をほころばせる

顔から火が出る (恥ずかしさ)

気どり屋のお前のことだから、デパートの特選品売場でそんなことをいわれて、顔から火が出る思いをしたろうね。(石坂洋次郎『光る海』)

You so like to appear sophisticated, the incident at the quality goods counter must have truly embarrassed you.

顔に紅葉を散らす (恥ずかしさ)

出会いがしらに殿方につきあたり、おもわず顔に紅葉を散らした。

It was absolutely embarrassing; no sooner had I stepped out than I bumped into a man.

顔向けができない (やましき) [類] 顔向けがならない

こんな不始末をしでかしては、もう親元にも顔向けができない。

After making such a monstrous mistake, I couldn't face my parents.

顔向けがならない (やましき) [類] 顔向けができない

顔を赤らめる・顔が赤らむ (恥ずかしさ) [類] 顔を赤くする・頬を赤らめる

顔を赤くする・顔が赤くなる (恥ずかしさ) [類] 顔を赤らめる・頬を赤らめる

「おめでたですか」といわれて、おもわず顔を赤くした。

Being asked, "Are you pregnant?" I blushed.

顔を曇らせる・顔が曇る (憂鬱) [類] 眉を曇らせる・眉が曇る

夫は日頃身綺麗なだけに、不快らしく顔を曇らせた。(芥川竜之介『秋』)

As her husband was extremely fastidious, the incident caused his brow to cloud over.

顔を暗くする・顔が暗くなる (憂鬱) [類] 暗い顔をする

大殿様はお顔を暗くなすったかと思うと、突然けたたましくお笑いになりました。(芥川竜之介『地獄変』)

The Lord showed his discomfort and then burst into laughter.

顔をしかめる (反感) (不満)

馬琴はこの声を聞くと、再び本能的に顔をしかめた。(芥川竜之介『戯作三昧』)

Bakin, having heard the voice, instinctively felt uneasy again.

顔を染める (恥ずかしさ) [類] 頬を染める

顔をほころばせる・顔がほころぶ (喜び)

受賞のしらせにおもわず、顔をほころばせた。

When he heard the news of the prize he was beside himself with joy.

肩が軽くなる (安堵)

責任のない、単なるオブザーバーとして参加すればよいと聞いて、肩が軽くなりました。

Being informed that I could participate as an observer without obligation, I felt greatly relieved.

固唾を飲む (緊張)

私は固唾をのんで、次の言葉を待っていると、(獅子文六『てんやわんや』)

I waited for the next word with wrapped attention....

肩で風を切る (誇らしさ・得意)

軍人も市民も日本人であれば肩で風を切って歩き、(遠藤周作『海と毒薬』)

If one was a Japanese, either soldier or civilian, one walked proudly and....

肩の荷がおりる (安堵)

この3月で委員の任期がおわって、ようやく肩の荷がおりた。

Much to my relieve, my term as a committee member finally terminated in March.

肩身が狭い (やましき)

身寄りの余りいない義妹には親類のうち(結婚式ニ)出席したのも親代りの私だけだったから肩身のせまい思いをしたらろう。(遠藤周作『海と毒薬』)

My sister-in-law, who had only a few relatives, must have felt ill at ease because I was the only one representing her family as a substitute for her parents at the wedding.

肩身が広い (誇らしさ・得意)

(コドモタチハ) 自分の家でも父が戦争にゆくということで肩身が広がったのだ。(壺井栄『二十四の瞳』)

The children took great pride in the fact that their father had gone to war.

肩を怒らす (誇らしさ・得意)

(鷹ハ)よだかの顔さえ見ると、肩を怒らせて、早く名前をあらためろ、名前をあらためろ、というのでした。(宮沢賢治『よだかの星』)

One of the larger hawks (taka) insisted proudly to another, as he looked at their little relative the whippoorwill (yodaka), that it would be better if he were to change his name.

肩を落とす (落胆)

結局、その電車にお時と佐山が乗っていたという確証を重太郎はつかめずに、彼は肩を落として博多にもどった。(松本清張『点と線』)

Jutarô returned to Hakata disappointed, having failed to obtain proof that Otoki and Sayama had been on the train.

肩をすぼめる (やましき)

平吉は思わず肩をすぼめた。やり切れないほどの淋しさが背中を走り抜けて行ったのだ。(半村良『どぶどろ』)

Heikichi felt shame for his having been overcome by loneliness.

髪を逆立てる (怒り)

いくら気に障ることを言われたからといって、髪を逆立てて飛びかかってきたのには驚いた。

I was greatly surprised by her hitting me simply because I had offended her.

汗顔の至り (やましき) [類] 赤面の至り

かかる見苦しき態をお目につけて何とも汗顔の至り (五味康祐『薄桜記』)

It's a great embarrassment to me that you should have become aware of this ugly situation and....

顔色なし (驚き) (恥ずかしさ)

素人とあなどっていた相手にズバリズバリと誤りを指摘されて、さすがの大先生も顔色なかった。

The learned scholar had to be ashamed when the person whom he looked down upon as an amateur was able to point out his errors with such accuracy.

肝胆を砕く (心配) [類] 心を砕く・肝を砕く

気がある (魅了)

自分の方で少し気があるだけで、夏子の方では何とも思っていないことだけはたしかだったし、(武者小路実篤『愛と死』)

It seems certain now that Natsuko had not taken me much into account and that it had been I who had fallen in love and....

気が重い (憂鬱)

呼び出し電話なので、頼むのが気が重いんだ。(吉行淳之介『技巧的生活』)

Because he didn't have his own telephone and had to be summoned by his neighbor, I was hesitant to call him to ask a favor.

気が軽い (安心)

浩太郎は、さっきからの自分の緊張と一人角力を思い出して、笑いたくなった。気が軽くなった。(源氏鶏太『男と女の世の中』)

Kôtarô, recalling how he had struggled with his tension, laughed and felt at ease.

気が気でない (心配)

広島は全滅したという噂が流れたし、気象台がどうなっているのか気が気でなかった。(柳田邦男『空白の天気図』)

Hearing the rumor had it that Hiroshima had been destroyed completely, I found myself worrying about the fate of the meteorological observatory.

気が腐る・気を腐らせる (憂鬱)

負け試合がつづいて気が腐る。

I really feel depressed over our losing streak.

気が差す (やましき)

兄貴から怒られるなら分るが、此方から兄貴に忠告するのは少し気がさすな。(志賀直哉『邦子』)

It's natural that my brother should scold me, but still I feel uneasy when I give advice to him.

気が沈む（憂鬱）

信子はそう云う淋しい午後、時々理由もなく気が沈むと、きつと針箱の引出しを開けては、その底に畳んでしまってある桃色の書簡箋をひろげて見た。（芥川竜之介『秋』）

When Nobuko felt particularly depressed, she would open her sewing box and remove from its bottom a letter written on pink paper that she kept carefully folded there.

気が進まない（躊躇）

病室へおもむくのは気が進まなかった。（高橋和己『悲の器』）

I hesitated to visit the hospital room.

気が済む（満足）

サンディーは気の済むまで猫を弄りまわすと（山本道子『ベティさんの庭』）

When Sandy played with the cat until she no longer felt regretful...

気が急ぐ（興奮）

みんな個展のための絵ですよ。あと五日しかないんで、気がせいている。（都筑道夫『脅迫者によろしく』）

They are to be pictures for a one-man exhibition, so I feel anxious about there being only five days left.

気が高ぶる（興奮）

試験の前の晩は気が高ぶってなかなか眠れない。

On nights before an exam, I usually feel so tense I can't sleep.

気が立つ（興奮）

最近このあたりは、暴力取締りで追いつめられたやくざ同士の殺傷事件が多く、彼らはひどく気が立っていた。（黒岩重吾『背徳のメス』）

Recently around here, there have been a lot of murders by the Yakuza, who are being sought by the police for their violence. The Yakuza is up in arms.

気が詰まる（憂鬱）

三度に一度は、夫婦で売り家を見に行かなければならなかったが、それは家主への偽装で、その度びに気の詰まる思いをした。（永井竜男『そばやまで』）

They had to go and look at houses for sale once every third time or so, but, since it was only a gesture towards the landlord, they felt uneasy each time.

気が咎める（やましき）

民子が少し長居をすると、もう気がとがめて心配でならなくなった。（伊藤左千夫『野菊の墓』）

When Tamiko stays for any length of time at all, I begin to feel uneasy.

気が無い（無関心）

言った調子、様子等に、いかにも気のない、投げやりな気分があったように思われてきたのだ。（海音寺潮五郎『西郷と大久保』）

In both word and manner, his attitude strikes me as being really indifferent and irresponsible.

気が抜ける（弛緩）

気が気でない日を過ごしてきただけに塔野はそのあっけなさに気が抜けた。（渡辺淳一『北都物語』）

Tono, who had been worrying about it day after day, felt empty when it was over in such a short time.

気が張る (緊張)

気が張っている間は、風邪もひかないものよ。

When you're up tight, you don't have the time to even catch a cold.

気が晴れる (満足) [類] 心が晴れる

いつかの夜のように親子で、ざっくばらんに話し合ってみたいのである。きっと、気が晴れるだろう。(源氏鶏太『男と女の世の中』)

We want to talk frankly, as we did the other night as father and son, so that we might put our minds to rest.

気が引ける (やましき)

信じきっている邦子を失望さす事は如何にも酷たらしく、気がひけた。(志賀直哉『邦子』)

I feel guilty about disappointing and being cruel to Kuniko, who trusts me so.

気が向く (好感)

貴族だから、なんでも気のむくまま、したいことができた。(星新一『ボッコちゃん』)

As he was a nobleman, he was able to do whatever he liked.

気が滅入る (憂鬱)

雪が深い上に、暗いがため、部隊全員の気が滅入りそうであった。(新田次郎『八甲田山死の彷徨』)

The snow was deep, the night dark, and the men of the platoon were verging on a state of depression.

気が揉める (心配) → 気を揉む

気が安まる (安堵)

泳げるようになって以来、海水浴に行くとはくは気分が落ちつく。……泳いでいると風呂に入っているよりも気が休まるくらいである。(筒井康隆『狂気の沙汰も金次第』)

Now that I've learned to swim, I feel really comfortable when I go swimming in the ocean. I even feel more at ease swimming than I do when I'm taking a bath.

気がゆるむ (弛緩)

機嫌がよい (満足)

あの人にもものを頼むなら、機嫌のいい時をねらっていかなきゃだめよ。

If you want to ask her for something, you'd better do so at just the right moment.

機嫌が悪い (不機嫌)

むし暑いせい、教え子の吉川がだまって学校を去ったせい、先生はいつもよりきげんが悪かった。(三浦綾子『塩狩峠』)

The teacher was more ill-tempered than usual because of the hot, muggy weather, or perhaps it was because of his student Yoshikawa, who had left school without a word.

気に入る (好感)

日本の巧緻なる美術工芸品は、少なからず奥さんの気に入っている。(芥川竜之介『手巾』)

The wife liked more than a little those Japanese crafts that were highly refined.

気に懸かる (心配) [類] 心に懸かる

吉広がその粗末な小屋に入り何をやっているのか気にかかったが、(中上健次『鳳仙花』)

I worried about Yoshihiro and how he was doing in his little shack, but....

気に食わない (反感)

二宮尊徳という男が嫌いである。どうも気に入くない。(丸谷オ一『男のポケット』)

I don't like Ninomiya Sontoku. I'm sorry, but I just don't like him.

気に障る (反感)

孫平次は、魚市場の青石を張った床が、汚れているのが、気に障っていた。(津本陽『深重の海』)

Magoheiji felt upset over the floors of the fish market; they were paved in blue stone and yet dirty.

気にする (心配)

日本人ほど外国人の評判を気にする国民はいない。(『週刊新潮』)

There must be no other people than the Japanese who worry so much about how they are perceived by foreigners.

気になる (心配)

自分を信じている妻を欺いている事が気になるからだ。(志賀直哉『山科の記憶』)

It's because he's bothered by the fact that he's being unfaithful to his wife.

気に病む (心配)

かれは自分が大学生の年齢にもなって親から仕送りを受けていることをたいそう気に病んで頭がおかしくなり、(倉橋由美子『ヴァージニア』)

He went crazy worrying about the money he received from his parents even though he was in college and....

気骨が折れる (気兼ね)

お姑さんと一緒に生活はなにかと気骨が折れる。

Living with one's parents-in-law is uncomfortable, in a number of ways.

気味がいい (満足) [類] 小気味がいい

時代劇で悪役がばったばったと切られるのは見ていて気味がいい。

In samurai movies it's great fun watching the bad guys getting killed one after the other.

気味が悪い (恐怖)

夜の公園はなんとなく気味が悪い。

To walk through the park at night is somehow or other a frightening experience.

肝が潰れる (驚き) → 肝を潰す

気もそぞろ (心配)

(サヨナラパーティーニ) 選挙で気もそぞろな改選組の姿はあまりなく、(『毎日新聞』)

There being very few at the sayonara party who were candidates worrying about being reelected....

肝に銘じる (感動)

このような失敗は二度といたしません。つくづく肝に銘じました。

I'll never make that mistake again. It's completely clear to me now.

肝を煎る (困惑)

合格おめでとう。すぐ親御さんに知らせてあげなさい。今ごろ肝を煎っているよ。

Congratulations on passing your entrance examinations. Be sure to let your parents know right away because they're quite apprehensive.

肝を砕く (心配) [類] 心を砕く・肝胆を砕く

肝を消す (驚き) [類] 肝を潰す

肝を潰す・肝が潰れる (驚き) [類] 肝を消す

杜子春は胆をつぶしながら、恐る恐る下を見下ろしました。(芥川竜之介『杜子春』)

A very frightened Toshishun looked down in shock.

肝を冷やす (恐怖)

フォルクスワーゲンは猛然とダッシュし、気まぐれに減速して、しばしばおれたちの肝を冷やしたよ。(大江健三郎『ピンチランナー覚書』)

The Volkswagens frightened us by first dashing wildly and then slowing down for no reason at all.

気を奪われる (魅了) [類] 氣をとられる・心を奪われる・魂を奪われる

運転中、携帯電話の操作に気を奪われて事故をおこしてしまった。

I caused the accident by driving and at the same time trying to use the cellular phone.

気を落とす (落胆)

お母さん、もっと元気を出して頂戴、そんなに気をおとすものじゃありませんわ。(福永武彦『忘却の河』)

Mother, be of good cheer; you won't be disappointed.

気を兼ねる (気兼ね)

臆病な五位は、これまで何かに同情を寄せる事があっても、あたりへ気を兼ねて、まだ一度もそれを行為に現したことがない。(芥川竜之介『芋粥』)

The cowardly Goi, who always worried about the reactions of those around him, had not now shown in his actions, even once, that he had any sympathy.

気を腐らせる (憂鬱) →気が腐る

気を遣う (気兼ね)

不安だからこそ余計な気を使いつつものを云っている。(幸田文『おとうと』)

No one who has been so uneasy pays very much attention to what he says.

氣をとられる (魅了) [類] 氣を奪われる

彼女が挨拶も返さずに、何かに氣をとられて、どんどん歩いて行くのにおどろくのであった。(三島由紀夫『潮騒』)

I was surprised to see her so caught up in her thoughts that she walked by me without even returning my greeting.

気を吞まれる (躊躇) (驚き)

見物の男たちは大音響に気を吞まれ、言葉を忘れていた。(津本陽『深重の海』)

The men watching were so flabbergasted by the explosive sounds that they lost their ability to say anything.

気を揉む・気が揉める (心配)

戦犯という恐ろしい繩が、首に懸りかけているのに、どんな剛胆な人物でも、気が揉めないという筈はない。(獅子文六『てんやわんや』)

Those who were found guilty of war crimes, even though they were brave, must have

begun to experience anxiety as they faced the gallows as war criminals.

気を許す (弛緩)

かな江は、相手がおなじ町内の顔見知りの中学生だったことに気を許したのか、急にふてぶてしいほどの落ち着きを取り戻して、(三浦哲郎『結婚』)

Kanae, who found her partner to be an old home-town high school friend, began to feel at ease but quickly regaining her composure....

気を良くする (満足)

老いた行商人は思いがけない売行に気をよくした。(三島由紀夫『潮騒』)

The old peddler was pleased by his exceptionally good sales.

気を悪くする (不満)

とうとう或日などはあの方もすっかり気を悪くされたと見え、(堀辰雄『かげろうの日記』)

Then, one day, he seemed to be totally unhappy and....

唇を噛む (悔しさ)

この会社に決まるまでにはずいぶん門前払い同様の扱いをうけて何度も唇を噛む思いをしました。

Until I was employed by this company, I had had the experience of being rudely treated several times and had felt frustrated.

唇を尖らす (不満) [類] 口を尖らせる

あの子は唇をとがらしてるよ。こんなはずじゃなかったって。

The child is complaining because things weren't supposed to turn out that way.

口を尖らせる (不満) [類] 唇を尖らす

やってみなければわからないんだから、口をとがらせていないで、まずやっごらん。

Give it a try without complaining, if you don't, you'll never get the hang of it.

首をかしげる (困惑) [類] 小首をかしげる

案じていたほどの変化は村では起きなかった。「おかしい」犬丸は首をかしげた。(『サンデー毎日』)

No change worth commenting on had taken place in the village. "Strange", Inumaru said to himself perplexed.

首を長くする (期待)

おはんにいろいろと働いてもらおうと思って、首を長くして待ちわびていたのでごわす。(海音寺潮五郎『西郷と大久保』)

I was anxious and waited so you could get some work done alone.

首を捻る (困惑)

患者の前でレントゲン写真を見ながら、しきりと首をひねる内科医 (筒井康隆『狂気の沙汰も金次第』)

A doctor who repeatedly looked in wonderment at the x-rays as the patient stood by....

暗い顔をする (憂鬱) [類] 顔を暗くする・顔が暗くなる

血相を変える (驚き) (怒り) [類] 顔色を変える・おもてを変える

とたんに母親がとびあがり、血相かえて子どもを探し始める。(『産業経済新聞』)

Suddenly the mother jumped up and in a state of fright began to search for the

children.

紅涙を絞る (悲しみ)

頼りにしていた先輩の突然の訃報に彼女は紅涙を絞った。

It grieved her greatly to learn that the friend upon whom she had depended for so many years had suddenly died.

声を尖らせる (不満)

ささいなことに声をとがらせるのがあの人の悪いくせだ。

It's with his shortcomings that he is most discontent.

声を呑む (驚き)

里子はアッと声をのみ、静江は、いや！ と叫んだ。(向田邦子『寺内貫太郎一家』)

Satoko caught her breath, saying "Ah!" Shizue cried, "No!"

声ははずませる (喜び)

「合格したよ」電話の向こうで、息子が声を弾ませて言った。

"I passed," my son shouted gleefully over the phone.

小気味がいい (満足) [類] 気味がいい

今回の失敗を勝気なあいつはさぞ小気味がいいと思うだろう。

He's competitive, and so he can't help but view my present setback with delight.

小首をかしげる (困惑) [類] 首をかしげる

美術教育としては、これはあんまり正統的なものじゃないよね。ちょいとおかしいと、誰だって小首をかしげるだろう。(丸谷オ一『男のポケット』)

As for art education, it's not authentic at all, is it? Everyone should question it.

心が痛む・心を痛める (悲しみ) [類] 胸が痛む・胸を痛める

心が躍る・心を躍らせる (興奮) [類] 胸が躍る・胸を躍らせる

心が騒ぐ (不安) [類] 胸が騒ぐ

気楽々に聞き流せばええのでござりますのに、なにやら心が騒ぎましてなァ。(宇野千代『おはん』)

I know I ought to relax and not take the thing so seriously, just let it go; but somehow I find it necessary to worry about it.

心が沈む (憂鬱)

心が沈んでいる時はかえって明るい音楽をきいたほうがいい。

It is good to listen to light music when you're depressed.

心がときめく・心をときめかせる (喜び) [類] 胸がときめく・胸をときめかせる

崑崙山脈、ゴビ砂漠などの名をみただけで心がときめく。タクラマカン砂漠やチベットあたりを指でたどり、うっとり空想する。(田辺聖子『欲しがりません勝つまでは』)

I get excited just looking as such places as the Konron Mountains and the Gobi Desert on the map. Tracing with my finger the Dakran Desert and Tibet transports me to dreamland.

心がはずむ・心はずませる (喜び) [類] 胸がはずむ・胸はずませる

3月にはこのいやな学校にさよならできると思えば今から心がはずむ。

It makes me very glad to be able to think that I can say goodbye to this awful school this coming March.

心が晴れる（満足） [類] 気が晴れる・胸が晴れる

これで心が晴れたろう。長年のライバルをやり込めたのだから。

He must be content. After all, he won out over his long-time rival.

心が乱れる（困惑）

話の中に、初恋の人の名が急に出てきたので、思わず心が乱れた。

Halfway through his story I got flustered when the name of my first love came up.

心に懸かる（心配） [類] 気に懸かる

息子の不幸がいつも心にかかっている。（三島由紀夫『潮騒』）

He worried over the misfortunes of his son.

心に刻む（感動） [類] 胸に刻む

あの日心に刻んだことばを一生の糧として生きてゆきたい。

I'd like to live my whole life by the words I heard that day and that so impressed me.

心に沁みる（感動） [類] 胸に沁みる

その人の話す言葉の一つ一つが心に沁みだ。

I was moved by every word he said to me.

心に残る（感動） [類] 胸に残る

誰にでもいつまでも心に残る思い出が一つ二つはあるものだ。

Everyone has one or two life-long memories.

心の琴線に触れる（感動）

捜査官のなにげない一言が心の琴線に触れたのだろう、それからはすらすら自供した。

The detective's casual comment seems to have touched him because he willingly started to confess.

心を痛める（悲しみ） →心が痛む

心を動かされる（感動）

友成先生は、竹本サンの裏声や涙に、ちっとも心を動かされたようでない、影のない口調で言われた。（田辺聖子『欲しがりません勝つまでは』）

Tomonari Sensei, paying no attention to Mr. Takemoto's high pitched voice and tears, spoke calmly.

心を打たれる（感動） [類] 胸を打たれる

キリストのいうことすること、みなよくわかって心を打たれる。（田辺聖子『欲しがりません勝つまでは』）

What Christ said and did have come to be understood and move us deeply.

心を奪われる（魅了） [類] 気を奪われる・魂を奪われる

子供は本に心を奪われているように返事をしなかった。（曾野綾子『華やかな手』）

The child was so engrossed in reading her book that she didn't answer.

心を躍らせる（興奮） →心が躍る

心を砕く（心配） [類] 肝を砕く・肝胆を砕く

自分の為によりよい生活を拓こうと心を砕いてくれたこの十年間の彼の好意（島木健作『生活の探求』）

The kindness over these ten years, during which he has worried about giving me a better way of life....

心をときめかせる（喜び） →心がときめく

心を悩ませる（心配） [類] 頭を悩ます

女王も王子の女性問題にはずいぶん心を悩ませたらしい。

The queen must have been very annoyed by the prince's love affairs.

心はずませる（喜び） →心はずむ

心を引かれる（魅了）

おれはこの研究に、なぜだかわからないが心をひかれている。なにか、すばらしい結果がもたらされそうに思えてならないのだ。（星新一『ボッコちゃん』）

I don't know why, but I'm so caught up in this research that I feel some splendid results will be forthcoming.

心を寄せる（魅了）

中には赤子さえいなかったら心を寄せもしただろうと思うような涼やかな眼の言葉遣いの優しい男がいたり、（中上健次『鳳仙花』）

Among them were men who had attractive eyes and soft words, and who would have interested me if I hadn't had a baby and....

腰が抜ける（驚き） →腰を抜かす

腰を抜かす・腰が抜ける（驚き）

嬢も腰を抜かしてたけど、俺もびっくりした。（半村良『どぶどろ』）

My wife was overcome with surprise, and so was I.

小鼻をうごめかす（誇らしさ・得意） [類] 鼻をうごめかす

手柄話を続け、小鼻をうごめかした。

He continued telling his success story very proudly.

小鼻を膨らます（不満）

やくぎに食い物にされる寸前だったということがいくら言ってもわからないらしい。小鼻をふくらませて横を向いたままだ。

She doesn't seem to be aware that she's about to be a victim of the Yakuza. She's still haughtily ignoring the situation.

小膝を打つ（満足） [類] 膝を打つ

ふと浮かんだ名案に小膝を打った。

He slapped his knee in satisfaction over the good idea.

【サ行】

思案投げ首（困惑）

外貨べらしの妙案を追って、大臣、長官、局長たちが走り回り、思案投げ首、天をあおいだ。（『毎日新聞』）

In order to find a good place to reduce the amount of foreign currency on hand, the ministers, the directors, and the division chiefs ran around worrying about how to achieve the best solution to the problem.

歯牙にもかけない（侮り）

「ふん」と言っ歯牙にもかけぬ顔つきをした。（井上友一郎『受胎』）

He said "ah uh," and did it in such a way as to show his indifference.

舌打ちをする (不満) (侮り)

彼女の身勝手なふるまいに舌打ちさせられたことも一度や二度ではない。

Several times now I've been vexed over her selfishness.

舌を出す (あざけり) (やましき)

そういう神がかりの演説とみそぎの実演とをやって、…よろしく利益をあげているので、本人ははらのなかでは案外正気で、舌を出しているのではないか。(阿川弘之『雲の墓標』)

Because he is benefiting financially from preaching and behaving as if he had divine power, he might in fact be quite sane, and just taking advantage of the whole thing.

舌を鳴らす (不満) (侮り)

公演の突然のキャンセルに集まった観衆はみな舌を鳴らしたという。

The audience booed the sudden cancellation of the performance.

舌を巻く (驚き)

作家の発想とはすごいものだと言舌を巻いたことをおぼえている。(『朝日新聞』)

I remember being surprised at the writer's creative ideas.

愁眉を開く (安堵) [類] 眉を開く・眉を伸べる・眉を広げる

皆は部隊と連絡がついたと思って愁眉を開いた。(火野葦平『麦と兵隊』)

Everyone was relieved at the thought that they would be able to make contact with the unit.

食指が動く (渴望)

何より彼より一番よいことは相手が初婚であると云う一事で、これは、或は望めないことではないのかと諦めかけていただけに、最も此方の食指の動く点であり、(谷崎潤一郎『細雪』)

What is best of all is that this is the first marriage for him, which we had expected to be beyond our reach [that she would find a husband who had not been married before], and so we are most moved by the fact that....

尻がこそばゆい (照れ)

あまりほめられると尻がこそばゆい。

When one is too much praised it's embarrassing.

尻目にかける (侮り)

彼は、まだビクビクと動いて居る、主人の屍体を尻目にかけてながら、静かに自殺の覚悟を堅めて居た。(菊池寛『恩讐の彼方に』)

Looking contemptuously at his master's dying but still-moving body, he calmly decided to kill himself.

白い目を見る (反感)

たしかに百姓の中には土地の値上がりを待つためだけに農業をつづけている者がいる。それで真剣に農業をやろうとしている私たちまで白い目でみられる。(『週刊朝日』)

Certainly there are farmers who continue to farm waiting for the rise in the price of their land. And for that reason, those who, like us, are involved in agriculture seriously are viewed negatively.

しんが疲れる (緊張)

この段取りにまで漕ぎつける過程は相当心の疲れるものであったが、(井上靖『闘牛』)

In order to get this far, one really has to proceed with intensity but....

心胆を奪う (恐怖)

敵の急襲に心胆を奪われた。

The sudden attack of the enemy came as a total surprise.

心胆を寒からしめる (恐怖)

信念をもち、火の玉のようになった少年の行動は、迷いが時折り顔を出すおとなたちの心胆を寒からしめる。(『読売新聞』)

The boy's behavior, which was determined and goal-oriented, threatened the adults whose feelings vacillated.

赤面の至り (やましき) [類] 汗顔の至り

背筋が凍る (恐怖) [類] 背筋が寒くなる

この夏は背筋も凍るような恐ろしい犯罪があいついだ。

This summer, fearful crimes occurred one after the other.

背筋が寒くなる (恐怖) [類] 背筋が凍る

何だかおそろしい予感で、背筋が寒くなりました。(太宰治『ヴィヨンの妻』)

I felt a fear that was fearful in its trepidation.

切齒扼腕する (悔しさ)

わずかの差で優勝を逸し、切齒扼腕する思いであった。

The loss of the battle brought him profound regret.

総毛立つ (恐怖)

昨日会った彼女が実は一年前に事故でなくなっていたと聞いて思わず総毛立った。

When I learned that the woman I met yesterday had, in fact, died in an accident a year ago, my flesh crawled.

相好を崩す (喜び)

昼食から帰った中年の地方公務員は、珍客を迎えたように相好をくずして応対してくれた。(『朝日新聞』)

The middle-aged, local official returned from lunch and was as pleased to see me as if I were a prized guest.

【夕行】

魂が消える (驚き) →魂を消す

魂を奪われる (魅了) [類] 気を奪われる・心を奪われる

空一面に鳴り渡る車の火と、それに魂を奪われて、立ちすくんでいる良秀(芥川竜之介『地獄変』)

Yoshihide, who was standing enchanted by the light of the burning car as it spread across the sky....

魂を消す・魂が消える (驚き)

前に危うく叫ぼうとした私も、今は全く魂を消して、唯茫然と口を開きながら、この恐ろしい光景を見守るより外はございませんでした。(芥川竜之介『地獄変』)

I, who had tried to shout out, could now, immobilized, and mouth agape, only watch the dreadful scene.

血が凍る (恐怖)

その時は全く体中の血が凍るかと思ったと申しますが、それも無理はございません。(芥川竜之介『地獄変』)

At the time, they said that they had been in total fear, and this seems quite likely.

血が騒ぐ (興奮)

勝利の予感に血の騒ぐのを必死に制していた…… (『毎日新聞』)

Anticipating victory, I trying to quell the mounting enthusiasm....

血が沸く (興奮) → 血を沸かす

血の気がひく (恐怖)

ぼくは椅子から飛び上がらんばかりだった。血の気が引いた。(高橋三千綱『天使を誘惑』)

I almost jumped out of my chair; I was so horrified.

血道をあげる (魅了)

あんな男に血道をあげるなんて、彼女らしくもない。

It's not like her to fall in love with a guy like that.

血沸き肉躍る (興奮) [類] 血が沸く

おそらく日本の競馬新聞ほど季節感や、物語の要素を多くもりこんだ予想紙はないのではあるまいか。…よく当たる、ということと同時に、血湧き肉躍るといった楽しみ、すでに新聞紙上からはうしなわれてしまった原始的な文章機能が、ここにはある。(五木寛之『風に吹かれて』)

Perhaps the *Japan Racing News* has the best seasonal articles and stories, as well as the most accurate horoscopes. The articles have down-to-earth sentences that work to create the kind of excitement that is lost in ordinary newspapers.

血を沸かす・血が沸く (興奮) [類] 血沸き肉躍る

逆転ホームランに血をわかす。

He was excited by the homerun that turned the game around.

旋毛を曲げる (不機嫌)

母がそののみ責めたことから私はつむじを曲げた。(尾崎一雄『暢気眼鏡』)

Because my mother had blamed me for nothing more than that, I became antagonistic.

でかい顔をする (誇らしさ・得意) [類] 大きな顔をする

手に汗を握る (緊張)

ふたたび近づいた危機を大殿がどのように切りぬけるか、手に汗握る思いで見まもっていた。(辻邦生『安土往還記』)

We watched the lord intently, wondering how he would manage the crisis that was approaching.

手に付かない (心配)

何か、がっくりとして、仕事も手につかなかった。(三浦綾子『塩狩峠』)

I was disappointed and for some reason unable to do any work.

手の舞い足の踏む所を知らず (喜び)

待ちに待った朗報に一同手の舞い足の踏むところを知らずに一夜をすごした。

They spent the night in revelry over the news that they had been waiting so long to hear.

手を合わせる (感謝)

意識不明のわたしを病院に運んでくれ、名前も告げずに立ち去ったという青年に今も心の中で手をあわせている。

Even now I pray with a grateful heart for the young man who carried me unconscious to the hospital and left without giving his name.

手を焼く (困惑)

大勢の中には、団体生活を乱す者もまじっていて手を焼いたが、私は直接ぶつかって補導に当たった。(『日本経済新聞』)

I tried to face those who were disturbing the balance of group life and with whom I was having trouble, and give guidance.

度肝を抜かれる (驚き)

時ならぬ沖合いからの叫びに、岬の村の人たちは、どぎもを抜かれたのである。(壺井栄『二十四の瞳』)

The village at the tip of the peninsula was shocked to hear the unexpected shouting form off-shore.

とさかに来る (怒り) [類] 頭に来る

「どうしても規則ですから」の一点張りにはさすがの俺もとさかにきたね。

I got really mad at what she kept saying: "The rules have to be followed no matter what."

怒髪冠を衝く (怒り) [類] 怒髪天を衝く

怒髪天を衝く (怒り) [類] 怒髪冠を衝く

藤原の怒りはまさに怒髪天を衝く勢いであった。(柳田邦男『空白の天気図』)

Fujiwara's anger was really furious.

と胸を衝かれる (驚き) [類] 胸を衝かれる

思いがけない話にと胸を衝かれ、どうしていいかわからなかった。

The unexpected news surprised him to the extend that he didn't know what to do.

鳥肌が立つ (反感)

あの毛むくじゃらの手で触られるかと思うと、思わず鳥肌が立ちました。

Imagining that that hairy arm was going to touch me, I broke out in goose pimples.

【十行】

生唾を飲込む (渴望)

ことに葉山はすばらしかったな。おれは生つばをのんだよ。(石坂洋次郎『光る海』)

Especially Hayama was beautiful. It was breath taking!

涙にくれる (悲しみ)

涙にくれる遺族を現場に残して、早速聞き込み捜査に取りかかりました。

Leaving the weeping family at the scene of the accident, we immediately began our investigation.

涙にむせぶ (感動)

五十年ぶりに兄妹の再会を果たし、涙にむせぶ記者会見となった。

After fifty years, brother and sister were reunited, and they held a press conference,

during which they cried constantly.

涙を呑む (悔しさ)

日頃親しゅう致した人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追い払ったと申す事でごさる。
(芥川竜之介『奉教人の死』)

It is said that those who were close to Lorenzo chased him away with regret.

苦い顔をする (不満)

それまでは苦い顔をなさりながら、良秀の方をじろじろにらみつめていらっしやったのが、
(芥川竜之介『地獄変』)

With an unpleasant glance he looked at Yoshihide and....

二の足を踏む (躊躇)

あんまり穢いのでさすがの伯母さんも二の足を踏んで買ってくれなかった。(中勘助『銀の匙』)

It was too dirty and so my kind aunt hesitated to buy it for me.

寝耳に水 (驚き)

全く寝耳に水で、当惑している。(山崎豊子『白い巨塔』)

They were sent into confusion by what had come as a complete surprise.

喉が鳴る (渴望)

仕事がすんだら、ビールでいっぱいと思うと、思わず喉が鳴るな。

Just thinking about our having a beer after work is making my mouth water.

喉から手が出る (渴望)

わたしは〈喉から手が出るほど、その石が欲しい!〉と思いました。(三浦哲郎『結婚』)

I wanted ever so much to get that rock.

【ハ行】

肺腑を衝く (感動)

肺腑を衝く心中の吐露であった。

His confession was so moving that it brought agony to our hearts.

歯が浮く (反感)

あいつの見え見えのおべんちゃらにはまったく歯が浮くよ。

I was really disgusted by his heavy-handed flattery.

肌に粟を生じる (恐怖)

トンネルの通過があと何分か遅ければわれわれも今頃はあのくずれた岩の下かと思うと、
思わず肌に粟を生じるのをおぼえました。

I broke out in goose bumps when I realized that we would have been under those rocks
had we passed through the tunnel just a few moments before.

鼻息が荒い (誇らしさ・得意)

兄は鼻息の荒い弟をたしなめた。

The older brother rebuked the younger for his pride.

鼻が高い・鼻を高くする (誇らしさ・得意)

お前もすっかり一人前になったものだ。世間の評判も大変いいよ。おかげでわたしも鼻が
高い。(半村良『どぶ』)

You've really grown up. Everyone speaks well of you and that makes me proud.

鼻がへこむ (やましき)

終戦で、昨日までえぱりくさっていた軍人やら役人やらの鼻がへこんだまといったらなかった。

After the war, the soldiers and the officers who were arrogant until yesterday have now come to lose face.

鼻毛が長い (魅了)

あいつはちょっときれいな女の子には鼻毛が長いんだから困ったもんだよ。

It's a pity that he should so easily fall in love with every pretty girl.

鼻毛を抜かれる (魅了)

あんな商売女に鼻毛を抜かれる男とは思わなかった。

I didn't think he was the kind of guy who'd fall in love with that sort of prostitute.

鼻毛を伸ばす (魅了)

ちょっと鼻毛をのばしたからといって、がみがみ言われる筋合いはないよ。

Just because I'm enchanted by a pretty face is no reason to scold me.

鼻であしらう (侮り) [類] 鼻の先であしらう

私は孝行だの何だとのという事を、……鼻であしらっていた男だが、(二葉亭四迷『平凡』)

I'm the sort of person who doesn't take such things as filial piety seriously, but....

鼻で笑う (あざけり)

ひとがコンピュータのことなんか知らないと思って、きいても鼻で笑うんですよ。

Thinking me so ignorant about computers, he laughed contemptuously at my questions.

鼻にかける (誇らしき・得意)

ドロマールは学識を鼻にかけ内勤医に恥をかかすことしかしない。(加賀乙彦『フランドルの冬』)

Delamare showed off his knowledge if only to rub the noses of the doctors in their ignorance and to embarrass them.

鼻につく (反感)

最初は快く感じられたばかり丁寧なホテルの対応も、何泊かするうち、鼻についてきた。

At first, I was pleased with the overly polite service provided by the hotel, but after a couple of days it began to get on my nerves.

鼻の先であしらう (侮り) [類] 鼻であしらう

私の提案は鼻の先であしらわれてしまった。

My proposal was treated very lightly.

鼻の下が長い・鼻の下を長くする (魅了) [類] 鼻の下を伸ばす

あいつは鼻の下の長い人間だから、油断はできない。

It's awfully easy for him to get a crush on a girl, so watch out.

鼻の下を長くする (魅了) →鼻の下が長い

鼻の下を伸ばす (魅了) [類] 鼻の下を長くする

あなたときたら、若い女性と見るとすぐ鼻の下を伸ばすんだから。

You all too quickly fall in love with pretty girls.

鼻持ちならない (反感)

その人間は、文学者として、似て非ナル鼻持ちならない存在になってしまいますわ……(石坂洋次郎『光る海』)

That person, though one of the literati, is artificial to the disgusting degree....

涙も引っかけない (侮り)

日頃は子供扱いにしてはなもひっかけない私を、彼独得の親しげでいて粗暴な笑顔で迎えてくれるとは！(三島由紀夫『仮面の告白』)

What did it mean for him, who usually made light of me as if I were a child, now to treat me to his uniquely intimate but wild smile?

鼻をうごめかす (誇らしさ・得意) [類] 小鼻をうごめかす

さもほめられるのが当然だといわぬばかりに鼻をうごめかしているのが癪に障った。

I dislike the attitude of a man who is so proud of himself that he thinks everyone should pay him homage.

鼻を高くする (誇らしさ・得意) →鼻が高い

歯の根が合わない (恐怖)

ドスンといって大地がゆれた瞬間、歯の根があわないほどの恐怖を感じた。

At the moment the earthquake struck, my teeth clenched.

歯の根を鳴らす (悔しさ)

ライバルに先を越されて奴も今ごろ歯の根を鳴らしているだろうと思うと胸がすく。

The fact that he's been overtaken by his rival pleases me greatly.

腹が癒える (満足)

彼の失敗で、彼女もようやく腹が癒えた。

She was relieved to learn at long last that he had failed.

腹が立つ・腹を立てる (怒り) [類] 向っ腹を立てる・向っ腹が立つ

トセは、菊の強情に腹が立った。(三浦綾子『塩狩峠』)

Tose was very angry over Kiku's obstinacy.

腹が煮えかえる (怒り) [類] 腹が煮えくりかえる・はらわたが煮えかえる・はらわたが煮えくりかえる

腹が煮え返る思いで彼の自慢話を聞いた。

She listened to his bragging with intense anger.

腹が煮えくりかえる (怒り) [類] 腹が煮えかえる・はらわたが煮えかえる・はらわたが煮えくりかえる

腹がよじれる・腹をよじる (おかしさ) [類] 腹の皮がよじれる・腹の皮をよじる・腹の皮を搓る・腹の筋を搓る・腹をよじる・腹を搓る

腹がよじれるほどおかしかったが、(高橋三千綱『天使を誘惑』)

It was side-splittingly funny, but....

腹に据えかねる (怒り)

あれもよっぽど腹にすえかねたらしく、殴り返して来たが、(中上健次『鳳仙花』)

Unable to endure the blow, he hit back, but....

腹の皮がよじれる・腹の皮をよじる (おかしさ) [類] 腹の皮をよる・腹がよじれる・腹をよじる・腹を搓る・腹の筋を搓る

その態度は腹の皮がよじれるほど滑稽だった。

That attitude is so wrenching that it turned my stomach.

腹の皮をよじる (おかしき) →腹の皮がよじれる

腹の皮をよる (おかしき) [類] 腹の皮をよじる・腹の筋を繕る・腹をよる・腹をよじる

腹の筋をよる (おかしき) [類] 腹の皮をよる・腹の皮をよじる・腹をよる・腹をよじる

腹の虫が承知しない (怒り) [類] 腹の虫が治まらない

腹の虫が治まらない (怒り) [類] 腹の虫が承知しない

腹の虫が治まらないので、当り散らした。

I was so upset that I found fault with everybody.

腹の虫の居所が悪い (不機嫌) [類] 虫の居所が悪い

あいつの腹の虫の居所が悪いときは逃げたほうがいい。

When that guy gets in a bad mood, you'd better keep clear.

はらわたがちぎれる (悲しみ)

この気持ちは自分の子供をなくしたひとでなければわからないと思います。はらわたがちぎれるというのはこういうことをいうのでしょうか。

Only those who have lost a child can understand the feeling. It can only be described as total anguish.

はらわたが煮えかえる (怒り) [類] はらわたが煮えくりかえる・腹が煮えかえる・腹が煮えくりかえる

はらわたが煮えくりかえる (怒り) [類] はらわたが煮えかえる・腹が煮えくりかえる・腹が煮えかえる

国鉄駅員の無礼な態度に、はらわたが煮えくり返る時がしばしばある。(筒井康隆『狂気の沙汰も金次第』)

There are times when I really get angry at the bad manners of the Nation Railway station attendants.

腹を抱える (おかしき) [類] おなかをかかえる

そんな馬鹿なこと、あるわけないのだが、友人は腹をかかえる。(筒井康隆『狂気の沙汰も金次第』)

There was no reason for such stupidity, but my friend held his stomach in laughter.

腹を立てる (怒り) →腹が立つ

腹をよじる (おかしき) →腹がよじれる

腹をよる (おかしき) [類] 腹をよじる・腹の皮をよる・腹の皮をよじる・腹の筋をよる

髭をなでる (誇らしき・得意)

交渉相手を十分に説得できたので、髭をなでる思いであった。

Having been able to persuade the negotiator sufficiently, he felt satisfied with himself.

膝を打つ (満足) [類] 小膝を打つ

その時、客は思わず膝を打って、さてさて世には不思議なこともあるものだという。(島崎藤村『夜明け前』)

And then the guest slapped his knee and said that there were in this world some really strange things.

膝を進める（熱心） [類] 膝を乗り出す

思い通りの好条件に、あやしいと思いつつ、つい膝を進めてしまった。

Even though I was suspicious about how good the conditions were, I couldn't help but be interested.

膝をたたく（満足）

先生のご説明に思わず膝をたたきました。二十年来の疑問が氷解いたしました。

I slapped my knee when the sensei explained the questions that had gone unresolved for twenty years.

膝を乗り出す（熱心） [類] 膝を進める・身を乗り出す

額に皺を寄せる（心配） [類] 眉に皺を寄せる・眉間に皺を寄せる・額に八の字を寄せる・額に八の字を作る

部屋の空気は重かった。身代金の連絡はその後途絶えたままだ。捜査陣も一様に額に皺を寄せて考え込んでいる。

The atmosphere was very depressing. There was not a word about the ransom money. So, all the police officers became worried and pondered the situation deeply.

額に筋を立てる（怒り） [類] 青筋を立てる

男は額に筋を立ててわめき散らした。

The fellow shouted angrily.

額に八の字を作る（心配） [類] 額に八の字を寄せる・額に皺を寄せる

額に八の字を寄せる（心配） [類] 額に八の字を作る・額に皺を寄せる

冷や汗をかく（恐怖）（恥ずかしさ）

途中で眼が覚め、寝言で静世の名を出しはしなかったろうか、と考え、冷や汗をかいてしまう。（高橋三十綱『天使を誘惑』）

He woke up in the middle of the night in a state of panic, wondering if in his sleep he had uttered the name Shizuyo.

表情をこわばらせる（不機嫌）

管理責任を追及されて経営陣も表情をこわばらせた。

The administration hardened its face after the investigation into their responsibility for the maintenance.

臍がくねる（おかしさ） [類] 臍がよれる

臍が茶を沸かす（あざけり） [類] 臍で茶を沸かす

あいつの言い訳にや臍が茶を沸かすよ。

I was convulsed with laughter by his excuse.

臍が宿替えをする（おかしさ）

たまには臍が宿替えをするような嘯が聞きてえもんだ。

Every once in a while I get the urge to go to a really good *rakugo* performance.

臍がよれる（おかしさ） [類] 臍がくねる

臍で茶を沸かす（あざけり） [類] 臍が茶を沸かす

臍を曲げる（不機嫌）

わたしはすっかりヘソを曲げて、勝手にしろ、と心のなかでつぶやいたんです。（丸谷オ一『男のポケット』）

I was so upset that I muttered to myself in protest, "Do whatever you want!"

屁とも思わない (侮り)

あいつはちょっと失敗したくらいじゃ屁とも思わんよ。

He's so lackadaisical that he doesn't feel any shame over such little failures.

頬が赤らむ (恥ずかしさ) (興奮) → 頬を赤らめる

頬に朱をそそぐ (怒り) [類] 満面に朱をそそぐ

あなたの方が私を裁くのは違法である、と A 君は頬に朱をそそいで、叫んだのであります。

Mr. A, livid with rage, screamed, "It's illegal for you to judge me."

頬を赤らめる・頬が赤らむ (恥ずかしさ) (興奮) [類] 顔を赤らめる・頬を染める・頬を紅潮させる

「こんなにうまくいったのは初めてだ」と彼は頬を赤らめて言った。

"This is the first time for things to turn out so well," he said with enthusiasm.

頬を紅潮させる (興奮) [類] 頬を赤らめる

頬を染める (恥ずかしさ) [類] 顔を染める・頬を赤らめる

「お会いできるとは思っていませんでした」と言って和子は頬を染めた。

"I hadn't thought that we'd be able to meet," said Kazuko, blushing.

頬を膨らます (不満)

「今ごろになってできないなんて」と孝子は頬を膨らませた。

"How can you say that even now you can't do it?," said Yoshiko with dissatisfaction.

ほぞを噛む (悔しさ)

去年は一点違いで臍を噛んだから、今年は何が何でも優勝するぞ。

Having been disappointed last year by losing by one point, this year we will take the prize.

骨身にこたえる (感動)

妾時代には男の嫉妬には骨身にこたえているだけに、(瀬戸内晴美『女徳』)

When she was a concubine, she was so disgusted by male jealousy....

骨身に沁みる (感動) [類] 身に沁みる

実際コメントでの苦労というのは並大抵のことではない。……おれは、これが骨身に沁みているのである。(藤本義一『サイカクがやって来た』)

The actual comment was extremely annoying. I'm disgusted by it.

【マ行】

まなじりを決す (怒り) [類] まなじりを裂く

「今度ばかりは許せない」と眦を決する勢いで出かけていった。

"This time I won't forgive you," he said and departed with determination.

まなじりを裂く (怒り) [類] まなじりを決す

眉が曇る (憂鬱) → 眉を曇らせる

眉に皺を寄せる (心配) [類] 額に皺を寄せる・眉間に皺を寄せる

眉に唾をつける (不信) [類] 眉に唾を塗る

この話はどうも眉に唾をつけて聞いておいたほうがよさそうだ。

The story could not be heard with belief.

眉に唾を塗る (不信) [類] 眉に唾をつける

眉をあげる・眉があがる (怒り) [類] 眉を吊りあげる

眉を曇らせる・眉が曇る (憂鬱) [類] 顔を曇らせる・顔が曇る

眉をしかめる (反感) (心配) [類] 眉をひそめる

眉を吊り上げる (怒り) [類] 眉をあげる

彼女は、他人の悪口はよく言うくせに、自分のことをいわれるとすぐ眉を吊り上げる。

She speaks ill of others often, but when others speak ill of her she immediately gets angry.

眉を伸べる (安堵) [類] 眉を開く・眉を広げる・愁眉を開く

眉をひそめる (反感) (心配) [類] 眉をしかめる

またか、とトヨの方では、眉を顰める。(三浦哲郎『結婚』)

“Again?” asked Toyo, unhappily.

眉を開く (安堵) [類] 愁眉を開く・眉を伸べる・眉を広げる

弟の容疑が晴れて眉を開く思いであった。

Because my brother is no longer suspected, I've begun to feel tranquil.

眉を広げる (安堵) [類] 眉を開く・眉を伸べる・愁眉を開く

满面朱をそそぐ (怒り) [類] 頬に朱をそそぐ

眉間に皺を寄せる (心配) [類] 額に皺を寄せる・眉に皺を寄せる

身に沁みる (感動) [類] 骨身に沁みる

「父よ、彼らを許し給え、そのなす所を知らざればなり」の言葉が、痛いほど身にしみた。(三浦綾子『塩狩峠』)

The words, “Father, forgive them, for they know not what they do,” moved me to the point of agony.

身につまされる (慈愛)

善吉の女房の可哀想なのが身につまされて、平田に捨てられた自分の果敢なさも一入になって来る。(広津柳浪『今戸心中』)

Empathizing with the sadness of Zenkichi's wife, I, who had also been thrown over by Hirata, felt even more depressed.

身の置き所がない (やましき)

フサの傍にいた男三人までをしなせていると、身の置きどころがないほど切なくなり、(中上健次『鳳仙花』)

When the three men who had been near Fusa were brought to their deaths, she felt sad that there was no place for her to exist.

身の毛がよだつ (恐怖)

こんなもの (=本のセロファン) がついていると、手がすべったり、おまけにイヤらしい音をたてたりして身の毛がよだつ。(北杜夫『どくとるマンボウ航海記』)

If the book is covered with that sort of cellophane, one is horrified by it's being slippery to the touch, and as a bonus it makes an awful sound.

身の縮む思い (やましき)

私は一つのことを長年続けてきたにすぎません。ただいま「その道の大家」とご紹介をいただいて、身の縮む思いです。

I had been doing my job for a long time. Now that I was being introduced as an expert I felt, however, terribly flustered.

耳が痛い (やましき)

おいおい、耳の痛い事云いまへんで (=いわないでくれ)。(阿川弘之『春の城』)

Hey! Don't say such grating things.

耳にこたえる (感動)

先輩の忠告は自暴自棄になっていた私の耳にいちいちこたえた。

The upperclassman's advice impressed me greatly in my desperation.

耳にたこができる (反感)

われら父親はこれまで教育ママから耳にタコが出来るほど聞かされてきたあの名台詞をそっくり借用して、こう言い返してやるのだ。(井上ひさし『日本亭主図鑑』)

We fathers are now going to make our retort borrowing an expressions we've heard so often from the education mamas.

耳を疑う (驚き)

「旅費、宿賃からこづかいまでもつから、映画を持って、モントリオールへ来ないか」といわれて、はじめはわが耳を疑った。(『国語慣用句辞典』)

I was astonished to hear that they had asked why, with the transportation and lodging paid, you hadn't come to Montreal with your movie.

身も世もない・身も世もあらず (悲しみ)

身も世もなく泣き崩れる遺族には声のかけようもなかった。

There wasn't a thing I could say to the family as they mourned their loss.

身を焦がす (魅了) [類] 身を焼く

少年は身を焦がす思いで夜もねむれない。

The youth was unable to get to sleep thinking of his love.

身を乗り出す (熱心) [類] 膝を乗り出す

身を焼く (魅了) [類] 身を焦がす

会えないと思えばかえって身を焼く思いに苦しめられる。この和歌はそうした恋の感情を切実に表現しています。

It's painful to think that one is unable to meet one's lover. This poem vividly expresses that feeling.

向っ腹が立つ (怒り) →向っ腹を立てる

向っ腹を立てる・向っ腹が立つ (怒り) [類] 腹が立つ・腹を立てる

なんでいつも俺ばかり貧乏くじをひくのかと無性に向っ腹が立ちました。

Why is it that I always get the short end of things? This time it's made me really mad.

虫が好かない (反感)

大体あの男、あたしゃ虫が好かないよ。(野坂昭如『てろてろ』)

All things taken into account, I don't like that guy.

虫酸が走る (反感)

あんなもったいぶった学者面をしている奴は、虫唾がはしるほど好かん。(山崎豊子『白い巨塔』)

I don't like a guy who has to a hateful degree the puffed up appearance of a scholar.
虫の居所が悪い (不機嫌) [類] 腹の虫の居所が悪い

軍医はよほど虫の居所が悪かったらしい。(井伏鱒二『黒い雨』)

The regimental surgeon seemed really displeased.

胸糞が悪い (不満)

胸糞が悪いったらなかったぜ、——浪人になるとせいせいするようだ。(尾崎士郎『人生劇場』)

I was really angry, but after becoming a *rōnin* I became refreshed.

胸騒ぎがする (不安) [類] 胸が騒ぐ

祖母の帰りが遅いので胸騒ぎがする。

I'm really uneasy because of the lateness of my grandmother's return.

胸が熱くなる (感動)

私のなにげない一言をずっと心にしまっておいてくれた人がいた。手紙を読みながら胸が熱くなるのを感じました。

There was someone who had kept my casual word in his heart all this time. I was really touched.

胸が痛い (悲しみ) → 胸が痛む

胸が痛む・胸を痛める・胸が痛い (悲しみ) [類] 心が痛む・心を痛める

とりわけ木村助教授の胸を痛めたのは、堀重太郎の遭難だった。(柳田邦男『空白の天気図』)

The thing that most saddened Professor Kimura was Hori Shigetarō's accident.

胸が一杯になる (感動)

思いがけない受賞の知らせに、胸が一杯になった。

Being informed of the unexpected prize filled me with emotion.

胸が躍る (興奮) → 胸を躍らせる

胸が裂ける (悲しみ) [類] 胸が張り裂ける

五年ぶりに帰国する娘の飛行機事故と聞いて胸が裂ける思いであった。

The plane crash had taken the life of her daughter, who was returning home after five years, and had brought great sorrow.

胸が騒ぐ (不安) [類] 胸騒ぎがする・心が騒ぐ

胸がすく (満足)

胸がすくような見事な答弁だった。

It was a splendidly gratifying refutation.

胸が高鳴る (興奮)

開会式でトランペットを吹く自分の晴れがましい姿を想像すると、今から胸が高鳴ります。

Just thinking about playing the trumpet at the opening ceremony excited me.

胸がつかえる (感動)

胸がつかえて何も申し上げられません。

I was so touched that I was unable to say anything.

胸が潰れる (悲しみ)

そういった彼女はもういないのだ、と思うと、悲しみで胸がつぶれるような気がした。(『家庭画報』)

I was saddened by the thought that she who had said it would not be there.

胸がつまる (感動)

胸が詰まって、ものが言えない。

Feeling deep emotion, I was unable to say anything.

胸がどきどきする (興奮)

床に就いてからも、その活動写真のことを考えると胸がどきどきしてならぬのだ。(太宰治『思い出』)

Even after having gone to bed, I felt the excitement of the movie.

胸がときめく・胸をときめかせる (喜び) [類] 心がときめく・心をときめかせる

彼からの誘いに少女のように胸がときめいた。

I was as excited as a young girl by his invitation.

胸が轟く (不安)

深夜の電報配達に胸が轟いた。

I felt uneasy when the midnight telegram was delivered.

胸がはずむ・胸をはずませる (喜び) [類] 心がはずむ・心をはずませる

胸が早鐘を打つ (不安)

オーディションも順調に進み、いよいよわたしの番です。胸が早鐘を打っています。

Now it's my turn to audition, and my heart is pounding a mile a minute.

胸が張り裂ける (悲しみ) [類] 胸が裂ける

家に残された家族が迫害されていると獄中で聞き、胸も張り裂けんばかりであった。

Having heard in prison that his family was being persecuted, he became extremely depressed.

胸が晴れる (満足) [類] 心が晴れる

胸が塞がる (憂鬱)

祖母の言葉を考えると私の胸は重くふさがった。(太宰治『思い出』)

Recalling my grandmother's words, I felt a pang of melancholy.

胸がふるえる (感動)

百貨店の画廊で偶然音子の絵を見た時は胸がふるえた。(川端康成『美しさと悲しみと』)

In the foyer of the department store I saw, quite by chance, a picture of Otoko and my heart fluttered.

胸がわくわくする (興奮)

嬉しさに私の胸はわくわくした。(志賀直哉『母の死と新しい母』)

I was delightfully excited.

胸に刻む (感動) [類] 心に刻む

胸にぐっとくる (感動)

僕は泣かぬぞと気張ったが、胸にぐっと来るものがあるって鼻汁が上唇に垂れて来た。(井伏鱒二『黒い雨』)

I wanted to cry, but I was so overwhelmed by grief that my nose began to run instead.

胸に沁みる (感動) [類] 心に沁みる

胸にこたえる (感動)

今年のメサイヤは胸にこたえた。

This year's *Messiah* was moving.

胸に迫る (感動)

とくにハレルヤコーラスが胸に迫った。

The Hallelujah Chorus was especially moving.

胸につかえる (心配)

彼の言葉が胸につかえて眠れない。

His words left me feeling so uneasy that I was unable to sleep.

胸に残る (感動) [類] 心に残る

胸にひびく (感動)

「私たちは本当に虐げられました」という言葉が胸に響いた。

The words, "We have truly been oppressed," greatly impressed me.

胸のつかえがおりる (安堵)

男勝りの同僚が上司にむかってポンポンものをいうのをきいて、日頃その上司の陰険な態度に不満が募っていたわたしもいっぺんに胸のつかえがおりました。

Hearing my colleague speak up in front of our supervisor made me feel the greatest delight, since I too was dissatisfied by his sly attitude.

胸を痛める (悲しみ) →胸が痛む

胸を打たれる (感動) [類] 心を打たれる

唐木博士の鑑定はさすがにりっぱね、傍聴していて、胸を搏たれたわ。(山崎豊子『白い巨塔』)

Dr. Karaki's expert testimony, as one would expect, was splendid; and as a member of the audience I was profoundly moved.

胸を躍らせる・胸が躍る (興奮) [類] 心を躍らせる・心が躍る

なにやら重大な用件のようだった。三郎は胸をおどらせながら聞いた。(星新一『ボッコちゃん』)

It seemed like a really important matter. Saburō listened in great excitement.

胸を焦がす (魅了)

明子からの手紙を胸を焦がして待っていた。

I awaited Akiko's letter with the deepest emotion.

胸をしめつけられる (感動)

一年一緒にいても、愛情を感じない場合だってあるし、十分ただけでも、胸をしめつけられるような愛情を感じる場合もあるわ。(源氏鶏太『男と女の世の中』)

There are cases where, even after being together for one year, there is no feeling of love; and there are other cases where, even after ten minutes, one feels the most exciting emotion.

胸を衝かれる (感動) (驚き) [類] と胸を衝かれる

志半ばで病に倒れたと聞いて胸を衝かれる思いがした。

I was greatly upset when I heard that he'd become ill right in the middle of his project.

胸をときめかせる (喜び) →胸がときめく

胸を撫で下ろす (安堵)

浩介は、(たすかった) と、胸をなでおろした。(源氏鶏太『男と女の世の中』)

Kôsuke was greatly relieved and said, "I'm saved!"

胸をはずませる (喜び) →胸がはずむ

胸を張る (誇らしき・得意)

「私の自信作です。」白布をとりさりながら、彼女は胸を張った。

"I'm terribly satisfied with this work," she said, proudly removing the white sheet.

胸を冷やす (恐怖)

暗がりて呼び止められ、思わず胸を冷やした。

Called to a stop by a cry in the darkness, he was frightened in spite of himself.

胸をふくらませる (期待)

彼は理由のない期待に胸をふくらます。(津本陽『深重の海』)

For no reason at all he was moved to great excitement.

目頭が熱くなる・目頭を熱くする (感動)

淡々と語られる苦しみ的人生に目頭が熱くなった。

I was greatly moved by the story of a sad human life told with such composure.

目頭を熱くする (感動) →目頭が熱くなる

目頭を押さえる (悲しみ)

深い苦しみを語ることばに目頭を押さえる者もいた。

There were those who wiped away a tear at the words that told of such deep sorrow.

目が飛び出る (驚き) [類] 目玉が飛び出る

請求書を見たときは不慣れな昭子は眼が飛出るとおもった。(有吉佐和子『恍惚の人』)

On seeing the bill, the inexperienced Akiko became agitated.

目がない (好感)

好奇心の強い子で、珍しいものには眼がないが、(三浦哲郎『結婚』)

Ever a curious child, she becomes excited over novel things and....

目くじらを立てる (怒り)

裏切者いうたら、みな眼くじら立てて指弾するが、(野坂昭如『てろてろ』)

As for the traitor, everyone angrily rejected him and....

目尻を下げる (喜び)

駆け寄ってくる孫を目尻を下げて抱き止めた。

When his grandson came running up to him, he took him in his arms with delight.

目玉が飛び出る (驚き) [類] 目が飛び出る

目玉が飛び出るような請求書が送られてきた。

The surprisingly high bill had arrived.

目に角を立てる (怒り)

堀木は、堀木の家品の品物なら、座布団の糸一本でも惜しいらしく、恥じる色も無く、それこそ、目に角を立てて、自分をとがめるのでした。(太宰治『人間失格』)

Horiki, frugal about even one zabuton thread if it were a possession of the Horiki family, now without a blush, angrily blamed me.

目に焼き付く (感動)

大震災後の悲惨な光景が今も目に焼き付いて離れません。

I'll never forget the miserable scenes I saw after the great earthquake.

目の色を変える (渴望)

フランスの田舎では、女たちはみんな、アラン・ドロンと聞いただけで目の色を変えるのだそう。 (丸谷オ一『男のポケット』)

In the French countryside the mention of Alain Dolan would fill all the girls with desire.

目の前が暗くなる (落胆)

そのとき、親会社の倒産の知らせが届いた。目の前が暗くなった。

Then, when we were informed of the collapse of the parent company, I felt terrible.

目は空 (魅了)

彼女にばかり気をとられて目は空になっていたのでしょうか、飛び出した子供に驚いて、急ブレーキを踏みました。

I was probably so enchanted by her that when the child appeared in front of the car I had to step on the brakes quickly.

目を疑う (驚き)

フランスにいるはずの息子の訪問に思わず目を疑った。

There was great excitement over the visit of the son who was supposed to be in France.

目を奪われる (魅了)

十八歳の肉体の抑制のきかぬ空腹だからね、もう膝の前に置かれた焼きソバの皿に眼を奪われてしまっていたんだ。 (大江健三郎『ピンチランナー調書』)

I, who had the disquieting hunger of an eighteen-year-old, was enchanted by the bowl of yaki-soba at my knees.

目を三角にする (怒り)

おじいちゃんは何かという目と目を三角にするからいやね。

It's awful when Grampa says something with such an angry look, isn't it?

目を白黒させる (驚き)

こんなお勘定で眼を白黒させるくらいなら、最初から銀座へなんか、こなけりゃいいのよ。 (筒井康隆『狂気の沙汰も金次第』)

If he gets that excited over the bill, it would have been better, from the beginning, not come to the Ginza.

目をパチクリする (驚き)

「何だって？」梅本は目をぱちくりさせた。 (小沼丹『風光る丘』)

Umemoto blinked his eyes in surprise.

目を細くする (喜び) [類] 目を細める

二十年ぶりの教え子たちの訪問に目を細くした。

She was delighted by the visit of the students she had taught some twenty years before.

目を細める (喜び) [類] 目を細くする

エヌ氏はダイヤルを回して金庫をあけると、なかには金貨がたくさんあった。強盗は目を細めた。 (星新一『ボッコちゃん』)

When Mr. N turned the dial and opened the safe, there were inside a great number of

gold coins. The burglar was overjoyed.

目を丸くする (驚き) [類] 目を見張る・目を剥く

道行く人は、案外、日の丸鉢巻の女が自動車を運転してる姿に気づかなかったが、ふとそれを認めた人は、目を丸くして見送った。(獅子文六『てんやわんや』)

The passengers took little notice of the woman who was driving and wearing a headband with the symbol of the rising sun, but those who did recognized her stared at her saucer-eyed.

目を見張る (驚き) [類] 驚きの目を見張る・目を剥く・目を丸くする

菊池教授は、災害の規模の大きさと変り果てた病院の姿にただ目を見張った。(柳田邦男『空白の天気図』)

Professor Kikuchi was simply overwhelmed by the sight of the hospital caught up in the immensity of the calamity.

目を剥く (驚き) [類] 目を見張る・目を丸くする

彼は文字に目をむいた。信じられなかった。(松本清張『点と線』)

He was astounded by the letters. He couldn't believe them.

【ヤ行】

指折り数える (期待)

あなた様のご来訪を指折り数えてお待ちしております。

We await your visit with the greatest anticipation.

指をくわえる (渴望)

富公がこの小女王の寵幸をほしいままにするのを指をくわえて見ているよりほかはなかった。(中勘助『銀の匙』)

I can do nothing other than look at Tomi-ko and admire the way he gets whatever he wants from the little queen.

よい気持ちがしない (不機嫌)

はいって来るなりそんな風に云われては、決していい気持ちはしなからう。(里見弴『多情仏心』)

He must have felt bad when right after he came in someone spoke in that way.

【ラ行】

溜飲が下がる (満足)

それとも昔お前を捨てた女が、今は亭主に捨てられている姿をみて溜飲が下がった気がするのかね。(森本薫『女の一生』)

About the woman that threw you over some time ago, you must be pleased to see her being tossed out by her husband.

柳眉を逆立てる (怒り)

レポーターの不躰な質問に柳眉を逆立てた。

He was angered by the impertinent questions asked by the reporter.

身体語彙別索引

青筋 → 筋

顎 (おとがい)

顎をなでる (誇らしさ・得意)
 顎をはずす (おかしき)
 おとがいを解く (おかしき)
 おとがいをはずす (おかしき)

足

足が重い (憂鬱)
 足がすくむ (恐怖)
 足が地に付かない (興奮)
 足を向けて寝られない (感謝)
 浮き足立つ (心配)
 手の舞い足の踏む所を知らず (喜び)
 二の足を踏む (躊躇)

汗 (冷や汗)

汗顔の至り (やましき)
 手に汗を握る (緊張)
 冷や汗をかく (恐怖)(恥ずかしき)

頭 (とさか)

頭が痛い (心配)
 頭が下がる (尊敬)
 頭から湯気をたてる (怒り)
 頭に来る (怒り)
 頭に血がのぼる (興奮)
 頭を痛める (心配)
 頭を抱える (心配)
 頭を搔く (やましき)
 頭を悩ます (心配)
 頭を捻る (困惑)
 とさかに来る (怒り)

胃液 (虫酸・溜飲)

虫酸が走る (反感)
 溜飲が下がる (満足)

息

息が詰まる (憂鬱)

息を凝らす (緊張)

息を殺す (緊張)

息をつく (弛緩)

息を詰める (緊張)

息を呑む (驚き)

後ろ髪 → 髪

腕

切齒扼腕する (悔しさ)

おとがい → 顎

おなか → 腹

顔 (面の皮)

合わせる顔がない (やましき)
 いい面の皮だ (やましき)(あざけり)
 浮かない顔をする (憂鬱)
 大きな顔をする (誇らしき・得意)
 おもてを変える (驚き)
 おもてを伏せる (恥ずかしき)
 顔が赤くなる (恥ずかしき)
 顔が赤らむ (恥ずかしき)
 顔が合わせられない (やましき)
 顔がくもる (憂鬱)
 顔が暗くなる (憂鬱)
 顔がこわばる (驚き)
 顔が晴れる (安堵)
 顔がほころぶ (喜び)
 顔から火が出る (恥ずかしき)
 顔に紅葉を散らす (恥ずかしき)
 顔向けができない (やましき)
 顔向けがならない (やましき)
 顔を赤くする (恥ずかしき)
 顔を赤らめる (恥ずかしき)
 顔をくもらせる (憂鬱)
 顔を暗くする (憂鬱)
 顔をしかめる (反感)(不満)
 顔を染める (恥ずかしき)
 顔をほころばせる (喜び)

汗顔の至り (やましき)
 暗い顔をする (憂鬱)
 赤面の至り (やましき)
 でかい顔をする (誇らしき・得意)
 苦い顔をする (不満)
 满面朱をそそぐ (怒り)

顔色

青くなる (驚き)
 色を失う (驚き)
 色をなす (怒り)
 顔色が変わる (驚き)
 顔色を変える (驚き)
 顔色なし (驚き)(恥ずかしき)
 血相を変える (驚き)(怒り)

肩

肩が軽くなる (安堵)
 肩で風を切る (誇らしき・得意)
 肩の荷がおりる (安堵)
 肩を怒らす (誇らしき・得意)
 肩を落とす (落胆)
 肩をすぼめる (やましき)

肩身

肩身が狭い (やましき)
 肩身が広い (誇らしき・得意)

髪 (後ろ髪)

後ろ髪を引かれる (不満)
 髪を逆立てる (怒り)
 怒髪冠を衝く (怒り)
 怒髪天を衝く (怒り)

肝胆

肝胆を砕く (心配)

気 (気持ち)

気がある (魅了)
 気が重い (憂鬱)
 気が軽い (安心)
 気が気でない (心配)
 気が腐る (憂鬱)
 気が差す (やましき)

気が沈む (憂鬱)
 気が進まない (躊躇)
 気が済む (満足)
 気が急ぐ (興奮)
 気が高ぶる (興奮)
 気が立つ (興奮)
 気が詰まる (憂鬱)
 気が咎める (やましき)
 気が無い (無関心)
 気が抜ける (弛緩)
 気が張る (緊張)
 気が晴れる (満足)
 気が引ける (やましき)
 気が向く (好感)
 気が減入る (憂鬱)
 気が揉める (心配)
 気が安まる (安堵)
 気がゆるむ (弛緩)
 気に入る (好感)
 気に懸かる (心配)
 気に食わない (反感)
 気に障る (反感)
 気にする (心配)
 気になる (心配)
 気に病む (心配)
 気もそぞろ (心配)
 気を奪われる (魅了)
 気を落とす (落胆)
 気を兼ねる (気兼ね)
 気を腐らせる (憂鬱)
 気を遣う (気兼ね)
 気をとられる (魅了)
 気を吞まれる (躊躇)(驚き)
 気を揉む (心配)
 気を許す (弛緩)
 気を良くする (満足)
 気を悪くする (不満)
 よい気持ちがしない (不機嫌)

機嫌

機嫌がよい (満足)

機嫌が悪い (不機嫌)
気骨
 気骨が折れる (気兼ね)

気持ち → 気

気味 (小気味)
 気味がいい (満足)
 気味が悪い (恐怖)
 小気味がいい (満足)

肝 (度肝)
 肝が潰れる (驚き)
 肝に銘じる (感動)
 肝を煎る (心配)
 肝を砕く (心配)
 肝を消す (驚き)
 肝を潰す (驚き)
 肝を冷やす (恐怖)
 度肝を抜かれる (驚き)

口
 開いた口が塞がらない (驚き)
 口を尖らせる (不満)

唇
 唇を噛む (不満)
 唇を尖らす (不満)

首 (小首)
 首をかしげる (困惑)
 首を長くする (期待)
 首を捻る (困惑)
 小首をかしげる (困惑)
 思案投げ首 (困惑)

毛
 総毛立つ (恐怖)

紅涙 → 涙

声
 声を尖らせる (不満)
 声を呑む (驚き)
 声をはずませる (喜び)

小気味 → 気味
小首 → 首
心地
 生きた心地がしない (恐怖)

心 (心頭)
 怒り心頭に発する (怒り)
 心が痛む (悲しみ)
 心が躍る (興奮)
 心が騒ぐ (不安) [類] 胸が騒ぐ
 心が沈む (憂鬱)
 心がときめく (喜び)
 心がはずむ (喜び)
 心が晴れる (満足)
 心が乱れる (困惑)
 心に懸かる (心配)
 心に沁みる (感動)
 心に刻む (感動)
 心に残る (感動)
 心の琴線に触れる (感動)
 心を痛める (悲しみ)
 心を動かされる (感動)
 心を打たれる (感動)
 心を奪われる (魅了)
 心を躍らせる (興奮)
 心を砕く (心配)
 心をときめかせる (喜び)
 心を悩ませる (心配)
 心をはずませる (喜び)
 心を引かれる (魅了)

腰
 腰が抜ける (驚き)
 腰を抜かす (驚き)

骨髓
 恨み骨髓に徹する (悔しさ)

小鼻
 小鼻をうごめかす (誇らしさ・得意)
 小鼻を膨らます (不満)

小膝 → 膝
歯牙 → 歯

舌

舌打ちをする (不満)
舌を出す (あざけり)(やましき)
舌を鳴らす (不満)
舌を巻く (驚き)

食指

食指が動く (渴望)

尻

尻がこそばゆい (照れ)

皺

額に皺を寄せる (心配)
眉に皺を寄せる (心配)

しん

しんが疲れる (緊張)

心胆

心胆を奪う (恐怖)
心胆を寒からしめる (恐怖)

心頭 → 心

筋 (青筋)

青筋を立てる (怒り)
額に筋を立てる (怒り)

背筋

背筋が凍る (恐怖)
背筋が寒くなる (恐怖)

相好・表情

相好を崩す (喜び)
表情をこわばらせる (不機嫌)

魂

魂が消える (驚き)
魂を奪われる (魅了)
魂を消す (驚き)

血 (血の気)

頭に血がのぼる (興奮)
血が凍る (恐怖)
血が騒ぐ (興奮)

血が沸く (興奮)

血の気がひく (恐怖)

血沸き肉躍る (興奮)

血を沸かす (興奮)

血の気 → 血

唾

固唾を飲む (緊張)

生唾を飲込む (渴望)

眉に唾をつける (不信)

眉に唾を塗る (不信)

旋毛

旋毛を曲げる (不機嫌)

面のかわ → 顔

手

手に汗を握る (緊張)

手に付かない (心配)

手の舞い足の踏む所を知らず (喜び)

手を合わせる (感謝)

手を焼く (困惑)

喉から手が出る (渴望)

度肝 → 肝

とさか → 頭

と胸 → 胸

涙 (紅涙)

紅涙を絞る (悲しみ)

涙にくれる (悲しみ)

涙にむせぶ (感動)

涙を呑む (悔しさ)

肉

血沸き肉躍る (興奮)

喉

喉が鳴る (渴望)

喉から手が出る (渴望)

歯 (歯の根・歯牙)

歯牙にもかけない (侮り)

切歯扼腕する (悔しさ)

歯が浮く (反感)
 歯の根が合わない (恐怖)
 歯の根を鳴らす (悔しさ)

歯の根 → 歯

肺 (肺腑)

肺腑を衝く (感動)

肺腑 → 肺

肌

鳥肌が立つ (反感)
 肌に粟を生じる (恐怖)

鼻 (鼻の先)

鼻が高い (誇らしさ・得意)
 鼻がへこむ (落胆)
 鼻であしらう (侮り)
 鼻で笑う (あざけり)
 鼻にかける (誇らしさ・得意)
 鼻につく (反感)
 鼻の先であしらう (侮り)
 鼻持ちならない (反感)
 鼻をうごめかす (誇らしさ・得意)
 鼻を高くする (誇らしさ・得意)

洩

洩も引っかけない (侮り)

鼻息

鼻息が荒い (誇らしさ・得意)

鼻毛

鼻毛が長い (魅了)
 鼻毛を抜かれる (魅了)
 鼻毛を伸ばす (魅了)

鼻の先 → 鼻

鼻の下

鼻の下が長い (魅了)
 鼻の下を長くする (魅了)
 鼻の下を伸ばす (魅了)

腹 (おなか・腹の皮・腹の筋・腹の虫)

おなかをかかえる (おかしき)

腹が癒える (満足)

腹が立つ (怒り)

腹が煮え返る (怒り)

腹が煮えくりかえる (怒り)

腹がよじれる (おかしき)

腹に据えかねる (怒り)

腹の皮がよじれる (おかしき)

腹の皮をよじる (おかしき)

腹の皮を繕る (おかしき)

腹の筋を繕る (おかしき)

腹の虫が治まらない (怒り)

腹の虫が承知しない (怒り)

腹の虫の居所が悪い (不機嫌)

腹を抱える (おかしき)

腹を立てる (怒り)

腹をよじる (おかしき)

腹を繕る (おかしき)

向っ腹が立つ (怒り)

向っ腹を立てる (怒り)

腹の皮 → 腹

腹の筋 → 腹

腹の虫 → 腹

はらわた

はらわたが煮え返る (怒り)

はらわたが煮えくりかえる (怒り)

はらわたがちぎれる (悲しみ)

髭

髭をなでる (誇らしさ・得意)

膝 (小膝)

小膝を打つ (満足)

膝を打つ (満足)

膝を進める (熱心)

膝をたたく (満足)

膝を乗り出す (熱心)

額

額に皺を寄せる (心配)

額に筋を立てる (怒り)

額に八の字を作る (心配)

額に八の字を寄せる (心配)

冷や汗 →汗

表情 →相好・表情

屁

屁とも思わない (侮り)

臍 (ほぞ)

臍がくねる (おかしき)

臍が茶を沸かす (あざけり)

臍が宿替えをする (おかしき)

臍がよれる (おかしき)

臍で茶を沸かす (あざけり)

臍を曲げる (不機嫌)

ほぞを噛む (悔しさ)

頬

頬が赤らむ (恥ずかしさ)(興奮)

頬に朱をそそぐ (怒り)

頬を赤らめる (恥ずかしさ)(興奮)

頬を紅潮させる (興奮)

頬を染める (恥ずかしさ)

頬を膨らます (不満)

ほぞ →臍

骨身

骨身にこたえる (感動)

骨身に沁みる (感動)

まなじり

まなじりを決す (怒り)

まなじりを裂く (怒り)

眉 (柳眉)

愁眉を開く (安堵)

眉があがる (怒り)

眉に皺を寄せる (心配)

眉に唾をつける (不信)

眉に唾を塗る (不信)

眉をあげる (怒り)

眉を曇らせる (憂鬱)

眉をしかめる (反感)(心配)

眉を吊り上げる (怒り)

眉を伸べる (安堵)

眉をひそめる (反感)(心配)

眉を開く (安堵)

眉を広げる (安堵)

柳眉を逆立てる (怒り)

身

身に沁みる (感動)

身につまされる (慈愛)

身の置き所がない (やましき)

身の縮む思い (やましき)

身も世もあらず (悲しみ)

身も世もない (悲しみ)

身を焦がす (魅了)

身を乗り出す (熱心)

身を焼く (魅了)

眉間

眉間に皺を寄せる (心配)

身の毛

身の毛がよだつ (恐怖)

耳

寝耳に水 (驚き)

耳が痛い (やましき)

耳にこたえる (感動)

耳にたこができる (反感)

耳を疑う (驚き)

虫

虫が好かない (反感)

虫の居所が悪い (不機嫌)

虫酸 →胃液

胸糞 →胸

胸 (と胸・胸糞)

と胸を衝かれる (驚き)

胸糞が悪い (不満)

胸騒ぎがする (不安)

胸が熱くなる (感動)

胸が痛い (悲しみ)

胸が痛む (悲しみ)

胸が一杯になる (感動)
 胸が躍る (興奮)
 胸が裂ける (悲しみ)
 胸が騒ぐ (不安)
 胸がすく (満足)
 胸が高鳴る (興奮)
 胸がつかえる (感動)
 胸が潰れる (悲しみ)
 胸がつまる (感動)
 胸がときどきする (興奮)
 胸がときめく (喜び)
 胸が轟く (不安)
 胸がはずむ (喜び)
 胸が早鐘を打つ (不安)
 胸が張り裂ける (悲しみ)
 胸が晴れる (満足)
 胸が塞がる (憂鬱)
 胸がふるえる (感動)
 胸がわくわくする (興奮)
 胸に刻む (感動)
 胸にぐっとくる (感動)
 胸にこたえる (感動)
 胸に沁みる (感動)
 胸に迫る (感動)
 胸につかえる (心配)
 胸に残る (感動)
 胸にひびく (感動)
 胸のつかえがおりの (安堵)
 胸を痛める (悲しみ)
 胸を打たれる (感動)
 胸を躍らせる (興奮)
 胸を焦がす (魅了)
 胸をしめつけられる (感動)
 胸を衝かれる (感動)(驚き)
 胸をときめかせる (喜び)
 胸を撫で下ろす (安堵)
 胸をはずませる (喜び)
 胸を張る (誇らしさ・得意)
 胸をふくらませる (期待)

目

驚きの目を見張る (驚き)
 尻目にかける (侮り)
 白い目で見る (反感)
 目が飛び出る (驚き)
 目がない (好感)
 目に角を立てる (怒り)
 目に焼き付く (感動)
 目の色を変える (渴望)
 目の前が暗くなる (失望)
 目は空 (魅了)
 目を疑う (驚き)
 目を奪われる (魅了)
 目を三角にする (怒り)
 目を白黒させる (驚き)
 目をパチクリする (驚き)
 目を細くする (喜び)
 目を細める (喜び)
 目を丸くする (驚き)
 目を見張る (驚き)
 目を剥く (驚き)

目頭

目頭を押さえる (悲しみ)

目くじら → 目尻

目尻 (目くじら)

目くじらを立てる (怒り)
 目尻を下げる (喜び)

目玉

目玉が飛び出る (驚き)

指

指折り数える (期待)
 指をくわえる (渴望)

溜飲 → 胃液

柳眉 → 眉

感情表現別索引

あざけり

いい面の皮だ
舌を出す
鼻で笑う
臍が茶を沸かす
臍で茶を沸かす

悔り・不信

悔り

歯牙にもかけない
尻目にかける
鼻であしらう
鼻の先であしらう
涙も引っかけない
屁とも思わない

不信

眉に唾をつける
眉に唾を塗る

安心

気が軽い

安堵・弛緩

安堵

顔が晴れる
肩が軽くなる
肩の荷がおりる
気が安まる
愁眉を開く
眉を伸べる
眉を開く
眉を広げる
胸のつかえがおりる
胸を撫で下ろす

弛緩

息をつく
息を抜く
気が抜ける
気がゆるむ

気を許す

怒り

青筋を立てる
頭から湯気をたてる
頭に来る
怒り心頭に発する
色をなす
髪を逆立てる
血相を変える
とさかに来る
怒髪冠を衝く
怒髪天を衝く
腹が立つ
腹が煮え返る
腹が煮えくりかえる
腹に据えかねる
腹の虫が治まらない
腹の虫が承知しない
はらわたが煮え返る
はらわたが煮えくりかえる
腹を立てる
額に筋を立てる
頬に朱をそそぐ
まなじりを決す
まなじりを裂く
眉があがる
眉をあげる
眉を吊り上げる
満面朱をそそぐ
向っ腹が立つ
向っ腹を立てる
目くじらを立てる
目に角を立てる
目を三角にする
柳眉を逆立てる

おかしさ →喜び・おかしさ

驚き

開いた口が塞がらない
青くなる
息を呑む
色を失う
驚きの目を見張る
おもてを変える
顔色が変わる
顔色を変える
顔がこわばる
顔色なし
肝が潰れる
肝を消す
肝を潰す
気を呑まれる
血相を変える
声を呑む
腰が抜ける
腰を抜かす
舌を巻く
魂が消える
魂を消す
度肝を抜かれる
と胸を衝かれる
寝耳に水
耳を疑う
胸を衝かれる
目が飛び出る
目玉が飛び出る
目を疑う
目を白黒させる
目をパチクリする
目を丸くする
目を見張る
目を剥く

渴望

食指が動く
生唾を飲込む
喉が鳴る
喉から手が出る

目の色を変える
指をくわえる

悲しみ

紅涙を絞る
心が痛む
心を痛める
涙にくれる
はらわたがちぎれる
身も世もあらず
身も世もない
胸が痛い
胸が痛む
胸が裂ける
胸が潰れる
胸が張り裂ける
胸を痛める
目頭を押さえる

感謝 → 尊敬・感謝

感動

肝に銘じる
心に刻む
心に沁みる
心に残る
心の琴線に触れる
心を動かされる
心を打たれる
と胸を衝かれる
涙にむせぶ
肺腑を衝く
骨身にこたえる
骨身に沁みる
身に沁みる
耳にこたえる
胸が熱くなる
胸が一杯になる
胸がつかえる
胸がつまる
胸がふるえる
胸に刻む

胸にぐっとくる	気に入る
胸にこたえる	目がない
胸に沁みる	興奮 → 困惑・興奮
胸に迫る	
胸に残る	困惑・興奮
胸にひびく	困惑
胸を打たれる	頭を捻る
胸をしめつけられる	首をかしげる
胸を衝かれる	首を捻る
目頭が熱くなる	小首をかしげる
目頭を熱くする	心が乱れる
目に焼き付く	思案投げ首
気兼ね → やましき・恥ずかしき・気兼ね	手を焼く
期待	興奮
首を長くする	足が地に付かない
胸をふくらませる	頭に血がのぼる
指折り数える	気が急ぐ
恐怖	気が高ぶる
足がすくむ	気が立つ
生きた心地がしない	心が躍る
気味が悪い	心を躍らせる
肝を冷やす	血が騒ぐ
心胆を奪う	血が沸く
心胆を寒からしめる	血沸き肉躍る
背筋が凍る	血を沸かす
背筋が寒くなる	頬が赤らむ
総毛立つ	頬を赤らめる
血が凍る	頬を紅潮させる
血の気がひく	胸が躍る
肌に粟を生じる	胸が高鳴る
歯の根が合わない	胸がときどきする
冷や汗をかく	胸がわくわくする
身の毛がよだつ	胸を躍らせる
胸を冷やす	慈愛
緊張 → 不安・緊張	身につまされる
悔しさ → 不満・不機嫌・悔しさ	弛緩 → 安堵・弛緩
好感	心配・躊躇
気が向く	心配
	頭が痛い

頭を痛める
頭を抱える
頭を悩ます
浮き足立つ
肝胆を砕く
気が気でない
気が揉める
気に懸かる
気にする
気になる
気に病む
気もそぞろ
肝を煎る
肝を砕く
気を揉む
心に懸かる
心を砕く
心を悩ませる
手に付かない
額に皺を寄せる
額に八の字を作る
額に八の字を寄せる
眉に皺を寄せる
眉をしかめる
眉をひそめる
眉間に皺を寄せる
胸につかえる

躊躇

気を吞まれる
気が進まない
二の足を踏む

尊敬・感謝

尊敬

頭が下がる

感謝

足を向けて寝られない
手を合わせる

躊躇 →心配・躊躇

得意 →誇らしさ・得意

熱心

膝を進める
膝を乗り出す
身を乗り出す

恥ずかしさ →やましさ・恥ずかしさ

反感

顔をしかめる
気に食わない
気に障る
白い目で見る
鳥肌が立つ
齒が浮く
鼻につく
鼻持ちならない
眉をしかめる
眉をひそめる
耳にたこができる
虫が好かない
虫酸が走る

不安・緊張

不安

心が騒ぐ
胸騒ぎがする
胸が騒ぐ
胸が轟く
胸が早鐘を打つ

緊張

息を凝らす
息を殺す
息を詰める
固唾を飲む
気が張る
しんが疲れる
手に汗を握る

不機嫌 →不満・不機嫌・悔しさ

不信 →侮り・不信

不満・不機嫌・悔しさ
不満

後ろ髪を引かれる

顔をしかめる

気を悪くする

唇を噛む

唇を尖らす

口を尖らせる

声を尖らせる

小鼻を膨らます

舌打ちをする

舌を鳴らす

苦い顔をする

頬を膨らます

胸糞が悪い

不機嫌

機嫌が悪い

旋毛を曲げる

腹の虫の居所が悪い

臍を曲げる

虫の居所が悪い

よい気持ちがない

悔しさ

恨み骨髓に徹する

切齒扼腕する

涙を呑む

歯の根を鳴らす

ほぞを噛む

誇らしさ・得意

顎をなでる

大きな顔をする

肩で風を切る

肩身が広い

肩を怒らす

小鼻をうごめかす

でかい顔をする

鼻息が荒い

鼻が高い

鼻にかける

鼻をうごめかす

鼻を高くする

髭をなでる

胸を張る

満足

気が済む

気が晴れる

機嫌がよい

気味がいい

気を良くする

小気味がいい

心が晴れる

小膝を打つ

腹が癒える

膝を打つ

膝をたたく

胸がすく

胸が晴れる

溜飲が下がる

魅了

気がある

気を奪われる

気をとられる

心を奪われる

心を引かれる

魂を奪われる

血道をあげる

鼻毛が長い

鼻毛を抜かれる

鼻毛を伸ばす

鼻の下が長い

鼻の下を長くする

鼻の下を伸ばす

身を焦がす

身を焼く

胸を焦がす

目は空

無関心

気が無い

やましさ・恥ずかしさ・気兼ね

やましさ

頭を搔く

合わせる顔がない
 いい面の皮だ
 顔が合わせられない
 顔向けができない
 顔向けがならない
 肩身が狭い
 肩をすばめる
 汗顔の至り
 気が差す
 気が咎める
 気が引ける
 舌を出す
 赤面の至り
 冷や汗をかく
 身の置き所がない
 身の縮む思い
 耳が痛い

恥ずかしさ

おもてを伏せる
 顔が赤くなる
 顔が赤らむ
 顔から火が出る
 顔に紅葉を散らす
 顔を赤くする
 顔を赤らめる
 顔を染める
 顔色なし
 尻がこそばゆい
 頬が赤らむ
 頬を赤らめる
 頬を染める

気兼ね

気骨が折れる
 気を兼ねる
 気を遣う

憂鬱

足が重い
 息が詰まる
 浮かない顔をする
 顔がくもる

顔が暗くなる
 顔をくもらせる
 顔を暗くする
 気が重い
 気が腐る
 気が沈む
 気が詰まる
 気が減入る
 気を腐らせる
 暗い顔をする
 心が沈む
 眉を曇らせる
 胸が塞がる

喜び・おかしさ

喜び

顔がほころぶ
 顔をほころばせる
 声ははずませる
 心がときめく
 心がはずむ
 心をときめかせる
 心ははずませる
 相好を崩す
 手の舞い足の踏む所を知らず
 胸がときめく
 胸がはずむ
 胸をときめかせる
 胸ははずませる
 目尻を下げる
 目を細くする
 目を細める

おかしさ

顎をはずす
 おとがいを解く
 おとがいをはずす
 おなかをかかえる
 腹がよじれる
 腹の皮がよじれる
 腹の皮をよじる
 腹の皮を繕る

総合研究 11 日・英慣用表現の対照研究

腹の筋を搓る

腹を抱える

腹をよじる

腹を搓る

臍がくねる

臍が宿替えをする

臍がよれる

落胆

肩を落とす

気を落とす

鼻がへこむ

目の前が暗くなる

〔1991～93年度総合研究11（日・英慣用表現の対照研究）共同成果発表〕

* 第1部は、本誌第58巻所載。